

363

19



始



363-19



強者の天地

著 康 路 小 仲





por L.

照小者著

清
樹晚涼含夕照

大正丙辰夏

雷均軒





俯仰不羞
面怪蜀

洪力以基
惑

意常不
給以救

譽猶煙
主務翠

樹晚涼
含五送

法

大正丙辰夏

雷均軒



緒言

宇宙は断えず成長し、断えず進化発展し行くを本則とすれば、一切の生物より森羅万象に至るまで、苟くも此の宇宙間に生存する以上は、向上努力を以て其の本義とせざるを得ない。此の本義に順應するものは興隆発展し、之に違背するものは墮落滅亡を免れざること、是れ動かすべからず曲ぐべからざる宇宙の儼然たる鐵則の然らしむる所にして、優勝劣敗自然淘汰は即ち此の現象に外ならぬ。然れば吾々が此の宇宙間に生存せる以上は、勝つか、負くるか、興隆するか、滅亡するか、此の二者の一を選ばざるべからざる運命の下に置かれて居るのである。然れば吾々は其

の周圍に壓迫し來る苦難窮厄は何等畏怖憂慮する所はないが、唯だ畏れても畏れざるべからざるは宇宙の一大鐵則の儼存である。此の故に吾々は個人としても、國家としても、飽くまでも剛健不撓の強的思想を以て自強不息、以て各自に自己の運命を開拓し、次ぎには國家の運命を興隆し、更に進んでは宇宙進化の大義に貢献すること、是れ吾々生存の本義であり本分に外ならぬといふのが此の一書全篇の大旨である。

宇宙の眞には「力」「強み」があるとはいふものゝ、之を以て其の全分なりとは考へられない。故に本書「強者の天地」の強は、單に「強み」の強にはあらず、勉強力行の強であり、自強不息の強に外ならぬことを諒して貰ひ度い。又本書は仲小路先生の著として之を刊行するに至つたとはいふものゝ、先生が親しく筆を執つて之を著述せられたといふ譯のものではなく、數年來折に觸れ機に應じて各種の新聞雜

誌等に口述せられたるもの、或は各種の會合の席上に講演せられたるものゝ中、特に強者主義の福音に關するものを選んで、編者が斯くの如くに編纂したるものに過ぎない。故に全編中に章節の分類に妥當を缺き、或は字句の使用に誤謬等の個處のないとも限るまいが、之は編者淺學の致す所である。先生の多忙を煩はして嚴密なる校閲訂正を請ふに忍びず、是等の諸點を編者の責任として刊行するに至つた次第であるから、重ねて之を諒して貰ひ度い。尙ほ一八頁の三行目に「寢ざめよき事こそなさぬ」とあるは「め」の誤植であり、一六二頁の十行目に「行者不慊心」の行者は「おこなひ」と訓むべきものであり、尙ほ此の外に誤植誤字も尠くあるまいが、幸に是等を諒して、本書の大旨のある所を領得して貰ふことが出来れば幸甚の事である。

即ち讀者が本書に依つて、吾々人類生存の本義の何たるか、宇宙と人生との關係、

個人と社會及び國家との關係は如何、人生社會の優勝劣敗生存競争の本義は如何、人生の競争場裡に於ける優勝者たるべき要義は如何、吾人奮闘の本懐は如何。是等の諸點に於て領得する所あり、以て個人として、國民として、又宇宙人類の一員として其の自分を完らし、其の本義を發揮する上に幾分なりとも裨益する所あらば、編者の微衷之に過ぎたるはない次第である。

大正五年十月

編者 井上泰岳

強者の天地 目次

第一章 鐵則

第一節 大理法……………一

廣大無邊の大威力—儼然たる鐵則の實在—鐵則の極致は此一句—榮枯盛衰の大根據—玉の如き勇者の心境

第二節 適者生存……………三二

生存競争界の優勝者—適者生存の三大要件—不測の災厄と解脫心—青年の氣風と國運

第三節 強者と弱者……………三七

醉生夢死中の霹靂一聲—日耳曼魂奮起の由來—彼は五百年我は三千年—森林中に強者の福音—長夢忽ち覺め驚愕狼狽—大正以來の國情如何

第四節 眞の強者

現代要求の根本思想—前途の光明無限の希望—儼乎たる天道の確信—個人と社會及び

國家—大鐵則と國法の威力—深刻なる人生の慘事

第二章 強力論

第五節 優勝劣敗

勝か負か二つに一つ—敗者轉禍爲福の用意—萬人必勝の根本要點—好戦者は文化の恩

人—堂々不朽の軍國主義—人類固有の破壊性—早熟國民懷疑時代

第六節 強者の生活

實力主義の時代潮流—人生成功の眞意義—一路春風長安に到る—一難加はり勇氣百倍

—風雲に乗ずるの要件—疾風の活躍千古の快事—艱難に生き逸樂に死す—荒法師か厭世家か—大人格鍛錬の要點

第七節 養力法

正當なる理解と信念—讀書の修養と讀書法—絶倫の精力蓄積要件—眞の幸福と幸福生

活—積極的處世戰闘主義—眞の大勇と充實生活—悠々自適光風齊月—精力の源泉熟醉法

第八節 強力餘訓

青年の地位と指導點—大正青年と明治青年—滅亡か興隆か我國運—如何なる恐怖も厭

苦も—此の慘狀は眞に股鑑—實力なき正義の末路

第三章 經國論

第九節 世界的大勢

日本帝國の世界的責任—自我擴大の自然的衝動—大戰亂後必然の機運—噫人生必然の

悲慘事—世界大勢の指示三大點—世界の大勢と水の流—地中海より大西洋—巴奈馬運

河完成の大勢—海勢の襲来と準備點

第十節 興國策……………三四五

現代興國の一大主張—國富保存論の要旨—國富保存主張の根據—金よりも母國の名譽—社會政策と興國要件—社會政策と海外發展—殖産興業の根本要義—英國民の瓦解的墮落—咄々怪事安樂の福音—興國策の根本要點

第十一節 國政論……………二八〇

爲政の要點と苦心點—明治の勃興氣運概觀—大正爲政の根本點—政治家の資質本領—公苦心慘愴の述懐—眞正なる憲政の要義

第四章 詠草

第十二節 時事雜詠……………三〇六

偶成—帝國議會閉會後之感—偶成二首—岡部子爵轉任之日即事—櫻花月下感—次水野氏韻—詣伊藤公墓—偶成二首—春日遅々—瀆殿賜宴—郊外遊先帝祭日—讀中朝事實有感—寄地方青年—題達摩圖二首—月下感—浮説紛々—次山縣元帥韻—同僚懇親會席上偶成—偶成—述懐—偶成—國民新聞紙上掲左詩—初夏感—偶感—似橋谷生二首—祝北海道鐵道千哩開通—立秋—祝知人銀婚宴—男子意氣—延元帝陵懷古—祝某新聞一萬號—詠史靜—回顧七年前今朝—開山縣公病回瘴—似友人—偶感二首—次江木冷灰韻—偶成二首—數次某氏韻二首—淫雨—痛嘆—曉起—觸目—今朝所觀—迅雷激—雲出岫—秋夜—有感—秋風秋雨—松島記遊詩

第十三節 歐雲漫詠……………三三二

フタベストの古城—東京大洪水—巴里所感—ウオタルの古戰場—萊茵河畔—さらば—エジンバラの宮殿—異郷の菊—家郷の音信—太平洋を望み—歸心如矢時事漫錄

—(目次終)—

強者の天地

第一章 鐵則

第一節 大理法

廣大無邊の大威力

抑々この宇宙間には、儼として犯すべからざる一大鐵則が存在して居る。宇宙間の生きとし生けるもの、乃至有ゆる森羅萬象、一つとしてその法則に服従せざるを

仲小路 廉著

得ざる所の、至微至妙なる一大鐵則が儼然と存在して居る。而してこの鐵則たるや、廣大無邊の大威力を有し、如何なるものもこの法則に戻ることを得ず、造次にも之に背けば必ず大なる制裁を受けざるを得ざる所の大威力を有して居る。この大威力を指して、或は天の威力といひ、或は神の威力ともいひ、或は宇宙の大靈ともいひ、或は大自然ともいひ、轉じて倫理學説となり、哲學思想となり、宗教信仰となり、更らに種々に分れて流派を爲し、教説を生じ、名稱を異にせるも、畢竟するに萬有を通じて一貫せる大鐵則の存在は疑ふべからざるものである。正邪の觀念といひ、善惡の思想といひ、因果の理法といふも、要するにこの宇宙の一大鐵則の範圍外のものではないのであつて、仰いでその實在を確認して、肅然と戒心恐懼し、それに依つて犖々として陶冶せられて向上發展の努力を怠らざるもの、是れ人類の面目である。苟くも人類として、儼然たる鐵則の實在を確認して、仰いで戒心恐懼する所

なくば、到底一日も存在することは出来ないのである。何故といふに、苟くも戒心恐懼するの念なくば、その結果や放縱不羈至らざるなく、終には人を害し世を害して憚る所なきに至る。放縱不羈至らざる所なければ、人類の生存機關たる社會の秩序は忽ちに破壊せられ、更らに人類の政治的團結たる國家の基礎に動搖を生じて、謂ゆる天日暗うして魍魎魍魎天地に跋扈するの状態を現出し、終に國家も社會も滅亡に至るは必然のことであり、従つて己も亦終には滅亡する外なきは當然の結果である。故に之を大にしては國家の興亡隆替、小にしては個人の榮枯盛衰、皆この一大鐵則に背くと背かざるに由りて分るゝとも説明することが出来る。

この故に儼然たる鐵則の實在を確信して、その曲ぐべからざる威力と、免脱すべからざる法網とは、畏れても尙ほ畏れざるべからざるの觀念、即ち天を畏れ、神を畏れ、宇宙の大靈を畏るゝの觀念が油然として胸臆に湧き來り、切に戒心恐懼して

向上努力を息まざるもの、是れ實に人類の勇者である。胸中に不屈不撓の信念を有して、仰いで天に恥ぢず俯して地に恥ぢず、千萬人と雖も我れ往かんの大勇氣は、實に此大確信より生じ來るのである。富貴も淫する能はず、威武も屈する能はざる所の、正を踏んで畏れざる勇猛精進、或は修身齋家治國平天下を己の責任として、拳々息むこと能はざる所の大理想、大抱負、皆この大確信より生じ來るのである。

儼然たる鐵則の實在

如何なる大なる暴力も、如何に微々たる思念も、この宇宙の大鐵則を破ることは出來ない。その時間に多少遲速の差こそあれ、假にも一度びこの鐵則を破れば、必ずその大制裁を受けざるを得ないことは、炳として日月の如く寸毫も疑ふ所はないのである。さて如何にして斯くの如き大鐵則の實在を認むべきやといふに、この事

に就いては古來幾多の哲學者や宗教家は専ら研究に研究を重ね、追求に追求を究めて、以て之を種々に説明し、解釋を下して居るが、我輩は茲に成るべく平易に、分り易く、成る程さういふものであるかと何人も點頭を得るやうに話して見よう。何事を説くにも、人は何物かの證據に依らなければ納得しない。他に明かに證據立てられたことに依つて、之れを類推する。斯うなつて居るから、これと同様なことは斯くもあらうと、判斷をするのが類推であるが、この類推に依つて證明せられたるもの、立證せられたるものとして納得して貰ひたい。今假りに劇場に於いて爲す操り人形を考へて見るが宜い。男女老少、種々の人形を排列して、操り芝居を演じて居るのを見るに、人形は何處までも人形である。如何に巧に製作せられ、如何に美事に裝飾されて居ても、人形は人形に相違ない。然るに此の人形が、一絲亂れず、生けるが如く動いて居る有様を見て何んと考へるか。最初は何人も誠に不思議

な現象であるとの感じを起さざるを得ないのであるが、併しながら一度びその内幕を見、その裏面を探ぐれば、誰れしも何等不思議の感は起らない。多くの人形が生けるが如くに老人は老人、子供は子供と、各々その働さを爲しつゝあるは、その後控へた黒頭巾を冠つて居る人形使ひ、若くはその上部にあつて操りの糸を操縦しつゝある人の技倆に属するのであつて、世に名人と稱せられた人形使ひ、或は名ある操りの技術者は、その人の有する技倆と熟練とに依つて、一絲亂れず、恰も活けるものゝ如く働かして居るのである。

或は又街上に於いて一旅團若くは一師團の兵が肅然と進行し、多くの人馬、多くの軍旗が整然と一定の規律に依つて行進を續けて行く模様を見たらば、例令目には見えざるも、必ずその旅團全部を指揮し、監督し、一定の行動を採らしめつゝある支配者即ち旅團長あることを疑はないであらう。果して然らば、更らに一師團の

大兵が整然として一定の行動を採つて居るを見れば、亦必ずその總指揮者たる師團長のあることを信じて疑はないのである。よしや師團長が見えると見えざるに拘らず、師團全體が整然一定の行動を採つて居ることを見れば、そこに總指揮者たる師團長の存在せることは誰れも疑はない。

更らに又多くの兵士が、一定の動作を爲しつゝあることを知れば、そこに何人も疑ふことの出来ぬ鐵則たる軍規のあるを知り得るであらう。即ち總指揮者たる師團長の存在することゝ、一定の軍規が之れを貫通せしめて居ることは、よしや目に見えずとも、誰しも疑を懐く餘地はないのである。これと等しき道理が宇宙の間に存在して居る。即ち天地間にも同様の關係があるのである。我々の生活せるこの天地我々の目撃せるこの宇宙、これ程整然として一絲亂れず、寸毫と雖も犯すことを得ざるものは蓋し他にないのである。四季の循環、晝夜の交代、悉く一定の規律の下

に運行し、春が来れば草は萌えて、花は匂ふ。秋が来れば萬葉漸次に紅葉し凋落する。禽獸、虫魚、山川草木、森羅萬象の有ゆる物この宇宙間に存在して居るが、各皆一定の働さを爲し、一定の行動を採り、千億萬年に亘りて少しも紊れることはないのである。陰陽消長、盛衰興亡、悉くこれ一定の規則の下に置かれ、一定の約束の下に支配せられて居るのである。

斯くの如く天の運行、自然の法則ほど確實微妙なものはない。これ程に整然と運行せるに就いては、こゝに一定の大鐵則が儼として存在して居ることは、最早や疑ふことは出来ないであらう。既にその大鐵則が存在するものとすれば、之れを實行せしめつゝある或る偉大なる偉力の存在して居ることも亦争はれないのである。この一大威力なる力を指して、之れを神と稱するも、大自然といふも、名前の附け方は何うでも宜しい。要するに何物と雖も、對抗することの出来ざる絶對無限の一

大威力を備へて居るものが、この宇宙間に存在して居るといふことを感知し、意識せざるを得まいと思ふ。斯く一大鐵則の實在を感知し意識する所以のもの、是れ人々がこの人生社會に立つて眞面目を發揮する根本要義である。

鐵則の極致は此一句

我輩は元來政界に身を委ねて居るものであるが、抑々政治なるものは普通一般に考ふる如き爾く變體のものでは決してない。普通に政治といへば一種の權謀術數を本義とするものゝ如く考へて居るが、政治の本領たるや普通の常道と毫も變る所はなく、寧ろ之を脱するを許さないのである。直言すれば一身を修め、一家を齊ふるの意義の擴大せられたるもの即ち政治である。總べて斯くの如く、種々の學理といふも、精神の修養といふも、或は宇宙自然の法則といふも、之を言葉や筆の上で説

明して見ると甚だ六ヶ敷くなつて際限がない。併し能く之れを打ち碎き、其の眞味を玩味すれば、全く一に歸する。而してその歸着したる一點は、即ち萬有に通じ萬道を貫ける一義である。それは何であるかといふに、之れを平たい言葉でいへば「當り前の事を爲す」といふ一言にて盡されて仕舞ふのである。

之れを物に譬へていへば、扇子の要である。歸着し、集合した一點は扇の要であつて、開いてその兩端の線を延長すれば、無限に擴大せらるゝが如く、要それ自身に於いて、既に廣大の意味を有して居る。天地自然の法則も、修養の大義も、皆この當り前のことに外ならぬ。何事も眞にその眞味に到達すれば、悉く當り前のことで、之はいはずと知れて居る位に思はれて居るが、此の事が實行されて行けばその人は必ず出世して豪くなるのである。

當然の事をするといふ半面は、無理をせぬといふ事である。無理は決して通るこ

とではない。無理の通つて居る様に見えるのは、一時的の錯覺で、決して永久に通るべきものではない。世の中に一つ無理をすれば、百も二百も無理をせざるを得なくなるのは、恰も一つの虚言を吐けば、その一つを彌縫せんが爲めに、二つ三つ續いて幾百の虚言を言はねばならぬと同様である。

一時は一世の富豪と呼ばれ、非常なる成功者であると謠はれたものが、一朝の蹉跌に身は獄底に繋がれ、妻子眷屬は離散し、一家路傍に迷ふ事となり、親族朋友總べての人々にまで迷惑を掛けるといふ例は極めて多いが、其の原因を深く探索して見れば、必ずその人は無理なことをした人であつた。一時の成功、一時の虚名、之れ等を得んとして、無理に無理を重ね、世の中を瞞着して居たのであつた。

然らば、當り前のこととは如何なることであるかといふに、これには餘程の意味がある。決して、平々凡々の意味ではない。東西古今、非常に豪くなり、眞實の大

成功を遂げたものは、此の意味を難なく解き開いた人である。過般獨逸で誠に學徳高く、一般獨人に對し非常なる感化を與へて居る碩學の一老人、ザルツマンといふ人の書を読んだ。この人は却々能く世の中を見渡して、人生の深い哲理を克く平易に説き明かして居るのであるが、一言一句、何ともいへぬ妙味を感じるのである。而してこの人の言葉の中にも、矢張り我輩と同様のことをいつて居る。人は決して無理の行を爲すべきものでないが、唯人間の悲しさには、兎角目前のことに誘惑せられて、知らず識らず取り返へしの附かぬ苦境に陥り、遂に一身を過るに至るのである。然るにその初めに當つては、如何なる人でも決して遂には斯くなるに至るべしと思はないであらう。目前に不當なことをしながらも、一時成功しつゝある人を見ては、あゝいふ手段方法に依れば、何人も成功も出世も出来る。何んぞ必ずしも眞面目に、窮屈に世を送るにも及ぶまいといふ考へが起る。此の考への起つた刹那

が、人間の最も危険なる場合である。一度さういふ感じが胸中に湧くと、それからそれへと種々な不都合を生じ、不正を働くに至る。その初めは全く瞬間刹那の唯だ一步の差であるが、つい誘惑に捉はれ、一步を踏み誤つた結果が遂に生涯を誤まるのである。

吾人一身の行爲は、その結果一國の隆類興亡に關することとなるのであるから、人は何うあつても無理なこと、不都合なことを働いてはならない。然るに目前の不義にして富み、不都合な働きを以て一時成功して居る者を見ると、こゝが實に神ならぬ人間の悲しさで、直ぐに慾心が動揺する。こゝが誠に六ヶ敷い點である。如何なる事があつても決して心を動かさず、斷じて搖ぎを生ぜぬと決心するに至るには非常な勇氣を要する。而してこの勇氣なるものは、心中に深く信ずる所がなくては出来ない。決して間違はぬと信ずるのが所謂確信であるが、此の確信を得れば此處

に一大勇猛心が起つて来る。然らば何うすればその確信が得らるゝかといふ事になるが、我輩は實際にその點に就いては深く苦心もし、工夫もしたのであるが、ザルツマンも矢張り同じ事をいつて居る。即ち此の確信、信念を得んとするには、何うしても宇宙の根本に就いて考を定めて掛らねばならない。天地の間に確かに之れを一貫する大なる鐵則がある。動かすことの出来ない約束がある。此の點に思ひ至る外はないのである。

榮枯盛衰の大根據

抑々一國が存立して益々發達し行くには、自ら由つて来る所の原因があると等しく、個人としても其一身の益々榮え、一家の益々榮ゆるも、必ずその由つて来る所の理由がある。それは何かといふに正邪曲直の觀念の混淆を許さざる一大鐵則の根

據である。至誠の道を踏み、正當の活動をなし、己を苦めて奮勵するものは、必ず相當なる好結果を得ると共に、懶惰荒廢、不都合なる行動に由りて利を漁せんとするものは、或は一時は偶然の僥倖で榮ゆる事あらんも、畢竟するに斯る榮華は浮雲の如くなるは斷じて争ふべからざるの事實である。されば學業にせよ、農工商の實業にせよ、如何なる業務たるに論なく、勤勉努力するものに對しては、その一代に於いて勤勉努力に相當するの光榮を得る譯である。或は縦令一代に於いて光榮を得る能はざるにせよ、その子孫の何れにか之れを得るのである。若し之れに反して、不義の富貴、濁れる榮華は己れ一代に於いて偶々無事に過すことが出来たとしても、其の子孫に至りては必ず其の餘殃を生ずるのである、之を物に譬ふれば、恰も物質的の遺傳病毒のやうなものである。要するに、物質的病毒たると精神的病毒たるを問はず、其の病毒は長く之れを子々孫々に傳ふることとなるのであるから、

實に恐るべきものは天地間に通ずる一大鐵則である。此の一大鐵則は、時の古今、地の東西を問はず一貫せる大事實である。我輩は讀書省察の間に於いて斯の如く信ずるのみならず、少年以來今日に至るまでの實歴經驗に徴して、毫も信じて疑はざる所である。

只だ茲に考へなければならぬことがある。總べて人生には何物にも主觀的觀察と客觀的觀察との二方面がある。如何に正しく善良なるものも、偶然の事變によりて、圖らざる災禍に陥るといふことは往々あることである。例へば藤田東湖が、彼の安政の大地震に際して其の母を救はんとし、却つて地震の爲めに其の身を殞したるが如きことがある。これ等は全く自己以外の客觀的に生ずるもので、之れは致し方がない現象である。之れと等しい事柄は、至當のとを爲して而かも不幸に沈む者の少なくないと同時に、他の一面には之れに反して不正不都合の行爲を働きながら、

自己以外の作用の爲めに圖らざる順境で通すものも絶無とはいへない。

斯る變態の現象が全く誘惑の生ずる所以で、即ち動もすれば迷ひ易きの弊を生ぜしむるのである。されど此處を一段深く考ふれば、其の間に人生の至微至妙なる妙味がある。之れ聽て境遇の順逆に處するの工夫、並に一大信念をして油然として湧き來らしむる鐵槌である。

玉の如き勇者の心境

抑々人間として幸福を望まないものはない、若し幸福を望まないものがあるといふならば、其れは偽善者である。人々が幸福を望むは本能である。されどその幸福なるものは如何なるものかといふ事を考慮することが肝要である。

平たくいへば、人は身體精神共に健全にして、常に喜悅の情を以て満たされて居

るくらの幸福なものはない。而して此境遇にある人生の状態は如何といふに、露骨に之を喝破すれば、何を措いても睡眠のよく出来る人の心境であるといつて差支はない。我輩の知人に「寝ざめよき、事こそなさま、世の人の、よしとあしとは、言ふにまかせて」と詠んだものがあるが、之れは慥かに健全なる人の人生觀の一部を表白したる句であると思ふ。縦令如何なる大厦高樓に住するとも、或は又如何なる美衣美食に飽くとも、夜分安眠の出来ない、謂はゆる寝ざめの善くない人程不幸なるものはない。縦令如何なる茅屋の中に在りても、能く一日の勤勞を終へて人生の盡くすべき務めを全うし、夕顔棚の下に座して涼風掖下に生ずる快樂は、逆も金錢の購ひ得る所の幸福ではない。蓋し神聖なる快樂、純潔なる快樂は斯かる間に生ずるのである。故に斯くの如き人ならば、一度び枕に就けば直ちに熟睡し、翌朝眼覺ひれば心氣爽快再び活氣を生じ、活動力を得て、知らず識らずの間に一家は榮え

てその子孫は幸福に至るのである。此の境涯に至らば、彼の順境と稱し逆境と稱するものは有つたものではない。

されば順境といひ逆境といふも、畢竟他動的客觀的に觀察したる心の作用である。之れを自動的に主觀的に觀察すれば、晴雨晝夜に拘らず、自己の胸中には常に光明が輝いて居るのである。此の道理より考ふれば、縦令意外のことで其の身が分外の順境に處したる事ありとも、少しも誇りとするに足らず。至當の方法、至當の道で進みつゝある人が、又遇々逆境に處することあるも、何んの屈撓があらう。茲に於いて圖らざる逆境に陥ることあるも、勇氣は更らに倍加し來り、所謂一難に逢ふ毎に勇氣一倍すとは此の妙味を喝破したるものであるのみならず、眞の勇者は更らに艱難を希望する、即ち「憂き事の、なほ此の上に積れかし、限りある身の、力ためさん」の覺悟は眞の勇者の大勇猛心の發現である。即ち自ら進んで逆境に處し

艱難に處して、能く自己を玉成せんとする精神氣魄は、實に天下を貫く一大鐵槌の實在を確信するものに於いてのみ初めて見ることが出来るのである。

天の人をして大成せしめんとするや、必ず一度は之れを苦しましむるといつた古人の言葉は、實に鐵則の眞理を喝破せるものであつて、彼の生れて温飽の中に成育し、筋肉精神共に弛緩せる青年は實に人生の不幸兒であるとは此の所以である。故に少年青年の時代に於て、難境逆境に立つて、心身を鍛練し、思慮を周密ならしめ、以て如何なる大事業を負担せらるゝも、驚かず、屈せざる丈けの身體精神を鍛ひ上げたるものは、自然に對して大なる感謝をしなければならぬと思ふ。敢て三世相をいふのではないが、人事の靈妙なる點は全く此處に存するのである。要するに人生には快晴の日のみならず、雨の日もある風の日もある。百花爛漫たる春の日を迎ふるには、必ずや嚴冬刻寒の時期を経なければならぬ。されば人たるものは榮ゆ

れども傲らず勝つても誇らざると共に、敗れて傷まず、春風場裡に靜かに落花を見るだけの襟懷がなくてはならない。而して此の心境に安住するは如何なる修養の人なるかといふに、常住坐臥宇宙の鐵則に戒心驚懼して、以て仰いで天に恥ぢず俯して地に恥づる所なき眞の勇者でなくてはならないのである。

第二節 適者生存

生存競争界の優勝者

優勝劣敗、自然淘汰は、即ち前節に述べたる宇宙の鐵則の一分であり、又社會の進歩發達の大原則である。故に無能者が手腕家に壓倒せられ、老朽者が少壯のものに凌駕せらるゝ頻々たる代謝交代の現象は、全く争ふべからざる自然の大勢と思は

なければならぬ。先年内務書記官大谷靖君の二十五年勤績の祝賀會があつて、我輩は其の會に列席し、特に一場の祝辭を述べた一人であるが、其の時も切にこの事を感じた。

縦令官途にあるにもせよ、はた會社商店工場にあるにもせよ、斯くの如く生存競争の激烈なる活社會にあつて、唯だ一日此の社會に生存するにしても、必ずそれだけの理由がなくてはならぬ筈である。況んや二十五年といふ永い年月の間毅然として一職を守り、其の間には屢々激烈なる淘汰もあつたであらうが、決して人より犯さるゝことなく、能く激烈なる競争と戦つて、其の職務を守つて居ることに就いては、大なる理由がなくてはならない。世間では或は大谷君が幾度びの淘汰にも其の厄運を免れて、今日までもその職にあるのは、誠に仕合せなことだと見るものもあらうが、それは全く皮相の見解であつて、仕合せとか、辛抱強いといふこと以外、

大谷君の今日あることに就いては、大なる理由がなくてはならない。適者生存は動かすべからざる定則であつて、若し其の人が其の地位に居ることが不適當であれば社會は決して其の人の存立を一日も許すものではない。世間には或は不適者として淘汰されて困つて居るものもあれば、或は自らの如く發展し得ずに世の中を悲觀して暮らす如きものも多いにも拘はらず、大谷君が二十五年も其の職にある所以は畢竟君が適者たるの資格を充分に具備した點に依るものといはなければならぬ。此の意味を述べて祝辭とした譯であつたが、然らば適者とは如何なる點を指すかといふに就いて、我輩は先づ三ヶ條を擧ぐる事が出来る。此の三ヶ條は何人が如何なる地位にあつて生存競争と闘ふにも、必ず心得て守らなければならぬ最大の要件であると思ふ。

適者生存の三大要件

其の三ヶ條の要件とは、第一はその人が其の職務上に獨特の技倆を持つて居ること、例へばその人が計理の任に當つて居れば、能くそれに堪ふるのみでなく、其の事柄の長い間の沿革の事情を細大漏さず諳んじて居て、例へば議會などで質問に應じて説明するにしても、如何なることを持ち出されても、其の人に分らないことはないといふやうなオトリリテになることである。さういふ人物は滅多にあるものでないから、即ちその人は其の地位に缺くべからざる人物であることを萬人が認める。さうなれば幾度び淘汰の波瀾が起つても、其の地位は牢乎として大磐石である。他の人が偶然外から來て其の技倆を凌がうとしても、到底如何ともすることが出来ない。

此の心得が今日の如き生存競争の激烈なる社會にありては、自分の職務を何人からも犯されない第一の要件である。此の心掛けて、自分の職務上のは誰にも後れを採らないやうに一生懸命で勉強して、其の職務に關する智識技能は至り盡せるものであれば、老朽淘汰の如何なる大波瀾が起つても、少しも恐るゝ所はない。例へば大谷君が二十五年間も重要な地位を獨占して決して人から犯されずに來た第一の理由は此の點である。

第二はその人の人格である。單に技倆ばかり勝れて居ても、餘りにその人が高慢であるとか、品性が下劣であるとか、利己主義で人に對する思ひやりが無いといふやうな性格上の缺點があつては、到底永く其地位を保つことは出来ないのである。故に能く自己を知つて、謙遜抑讓の徳があつて、人に對して交情の暖かな性格がなくてはならない。一口にいへばその人が社會に圓滿な性格を持つて居ることであつ

て、長上を敬ひ、同僚と親しみ、下員を愛する性情が自然に備はつて居る性格がなくてはならぬ。我輩は現に大谷君の性格上、明かに此の點を認めて居た。例へば我輩がその局の一部に當つた遞信省内の人員淘汰の際にも、切に此事を感じた。單に技倆の上からいへば、罷めさせるには惜しい人物があつたかも知らない。それといふは我輩が遞信省内の人物の如何を盡く知り盡した上で任免を決した譯ではなくそれ／＼の係より「之れ／＼の人物は働かないから罷めさせても宜いでせう」といへば、我輩はそれに對して承認したのが多い。故に多くの中には、或は私意を揆まれて、相當に技倆のある人物も働かないと認められて、免職に遭つたものもあるかも知らない。けれどもさういふ人が若しあつたとすれば、其の人は技倆こそは立派でもあらうが、必ず他の點に於いてさういふことに立ち至る理由がなくてはならぬ。即ち高慢であつたとか、下僚に對する同情心がなかつたとか、其の性格上何

處かに必ず缺點があつたに相違ない。

第三には自己を知るの明がなくてはならぬ。動もすれば人は無暗の上に墜りたがるものであるが、之れが必ず失敗の本である。自分の分限、即ち自分の智識技能に超えた地位に上つて虚名を博することを喜ぶのが、人情の弱點であるが、適者生存の眞理は決して之を許さない。假りに不適當の地位に据ゑて置くことは社會が一日も許さないもので、その反動として忽ちどん底に振り落さるゝのは當然である。本よりさういふ不心得である人間の常として、現在の職務に對して、常に不平を抱いて不熱心で、従つて不適者として現在の位置からさへ動もすれば淘汰さるゝ事になる次第であるが、能く自己を知つて、自分の天職は之れ以外にないといふ分別をつけて其の職に當るべきである。さうすれば職務に對して非常な執着心が起る、之れが大事なこと、執着心がなければ一生懸命になる氣は出ない。

故に職務に精通して獨特の技倆を得るに至るにも、又其の職務に安んじて周囲の人に對して暖かなる交情を保つに至るにも、皆な自己を知つて其の分に安んずるといふのが本である。故に最も冷靜に、最も公平に能く自ら顧みて、自分の分限とすべき所、自分の安んずべき所は何處であるかを充分に吟味し、其の止まる所を知り其處を守る道を知るものであれば、如何なる淘汰の波瀾に遭つても驚くことはあるまいと思ふ。

不測の災厄と解脱心

以上の三要件を辨へて居るものであれば、其の人が如何なる地位に立つても、其處は立派に存立すべき權利あるものであつて、如何なる風波が起つても、又如何なる人が之れを邪魔せんとするも、其の地位を動かすことは決して出来ない。けれども

若しその一つを缺けば既に不適者である、如何に嚙りついて居度くとも、社會は一日も其人の存立を許さない。けれども世の中には或る惰力的勢力なるものがある。例へば金持ちの家に生れた息子は、無能でも安樂に暮して居るといふ如き例外はある。之れは其の父の非常なる勤勉努力の惰力的勢力の残す一時の現象であつて、斯ういふ不自然の現象は、時を経るにつれて自然に返へらざるを得ない。「誠は天道なり之れを誠にするは人の道なり」とは此の點をいうたものであると思ふ。即ち優勝劣敗自然淘汰は動かすべからざる自然の道である。故に勝れたものがドシドシ上に進んで行くのは至當の事で、即ち之れを誠にするといふ人の道である。然るにそれを嫉むとか、羨むとか、邪念妄執を起すとかするのは、畢竟誠といふ天の道を解しないものといはなくてはならぬ。

我輩は日曜の朝は多くの子供と一緒に自分の庭園を散歩するが、其の時にも屢々

此の事に就いて聽かせる。單に人類のみならず、宇宙の萬有、草木でも、小石でも、苟くも存在する以上は皆各其の理由がある。大木が亭々として空を凌ぐ程成長して居る模様を見るに、矢張りそれだけの理由がある。時には枝を切り下さるゝこともある。根を刈り取らるゝこともある。さうすると更らに他の方面に向つて枝を延ばす、根を張る。時には岩に打つ突かる事もあらう。其の時には非常な困苦を忍んで外の方面に出る。有ゆる障礙を排除し、風雨と闘つて、終に鬱蒼たる幾百年の巨木となるのであるが、我輩は此の有様を説明して子供にいつて聽かせる。

人間が此の社會に生存するに就いての周圍の關係は、之れと少しも異つた事は無い。折角腕を伸ばさうとすれば、直ぐに打ち折られて仕舞ふやうな事件が起ることであらう。或は前面に岩のやうな大障害に打つ突かることも必ずある。それ等の困難に堪えて更らに他の方面に進み出ようとするには、非常の勇氣がなくてはならぬ。

い。故に我輩は前の三要件の外に更らに此の勇氣を付け加へざるを得ない。

人間の社會は自然淘汰適者生存の大原則が過ちなく循環し行くものならば、少しも恨むことはないが、善人の頭にも雷は落つる世の中で、不自然の淘汰といふことも、時に依つては起らないとは限らない。其の時の覺悟は何うであるか、此の點が心得置くべき大事な事である。そこで人間には大いに執着する念のあると同時に、大いに解脱する心掛けが必要である。即ち世の中は麗かな天氣の日許りあるものではない。時には雨も降る、風も吹く。斯ういふことも世の中には有り勝ちだと解脱して、心掛を一轉する雅量がなくてはならない。此の心掛けは我輩が常に拳々服膺して一日も忘れない所であつて、此の心掛けがなくては行路難多き人生の海に棹して無難の航海を全うすることは到底出来ないであらう。

高杉晋作と野村望東との應酬に「おもしろき事もなき世をおもしろく、住みなす

ものは心なりけり」と云ふ歌がある。此の心掛けてなくてはならないと思ふ。あれ程の人物であつたけれども、面白いことばかりはなかつたと見ゆる。そこを面白く暮らすといふ雅量が大事であつて、一度び不自然の波瀾に出遭つては、直ぐにそれを悲観するといふが如き意氣地なしては、心廣く體寛かに保ちて更らに新方面に進み出る大勇氣を振り起す如きことは到底覺束ない。

青年の氣風と國運

我輩は先年歐洲諸國を巡歴して大いに感じたことがある。それは歐洲の青年が極めて勤勉努力の精神に富んで居る一事である。青年の氣風といふことは、大いに興味のあることで、又甚だ大切なことであるから、我輩も殊に注意して研究したのであるが、一國の隆盛と衰退とは、其の國現在の青年少年の氣風如何に依りて定まる

といふは決して過言でない。國家の隆替興亡の分岐點は、青年少年の氣風、即ち其の意志や方針にあるのである。

各國は皆事情を異にし、風俗習慣を異にして居るが、國運の隆盛する國は必ず勤勉努力の國民を有する國であつて、國運の衰微して居る國は、勤勉努力の精神を缺いて居る國民を有する國である。之れは古今を通じ、内外を通じて動かすべからざる眞理にして、勤勉努力の精神が一般國民に瀰漫して居る國家は、隆々として發展するは疑ふべからざる事實である。

之れは常に國家ばかりでなく、一個人に就いても同じである。如何に才智に秀でた青年でも、不勤勉懶惰であつて、其の才智を活用しなかつたならば、其の才智を發揮せしむべき時を失ひ、何うして他に秀でた立身出世が出来やうぞ。勤勉努力は一切の事業の根柢である。勤勉努力を缺く事業は到底成功する見込がない。學理を

研究するも、事業を企つるも、實業に従事するも、勤勉努力の精神さへ有して居れば必ず秀抜な成績を擧ぐることが出来る。

英國が長く富強の地位を世界に保ち得るは何の爲めであらう。人は長く富貴なれば懶惰放逸となり、國は長く富強なれば自然衰滅の非運を現すのである。彼の羅馬は一時國富み兵強く、國威歐亞の天地を震撼したのであつたが、國民は漸次放逸となり、長く此の優秀の地位を保つ事を得ずに衰滅して仕舞つた。其の他各國興亡の歴史に徴して見るも、長く富強の地位を保つことの至難なるは皆此の人情の弱點に本づくのである。然るに英國のみは長く富強の實を有し、依然として世界最大最強の地位を保ち、猶國運は隆々として發展に向つて居る。之れは其の國風たるアングロサクソン人種の特長の力であるけれども、就中其の重要な原因は、英國の上流社會即ち貴族や富豪の心得が善いからである。一體貴族や富豪の子弟は富貴に慣れ

て懶惰となり、其の心身も漸次隋弱となるのであるが、英國の上流の人々は之れに反し、心身の兩全といふことに意を注ぎ、智識の練磨に力を盡し、一身を持するに極めて質素である。英國の貴族富豪は其の子弟教育に全力を盡して居る。常に身體の強健に意を注ぐのみならず、徳を磨き、智識を啓發し、其の教育の遺憾なきを期して居る。故に身は富貴に居ながらも依然として困苦に堪え、其の心身も依然として強健である。従つて勤勉努力の精神は國內に充實して居る。之れ大英國の長く富強の地位を保ち、其の國運の愈々發展する所以である。

獨逸も亦英國と等しく、上は陛下より下は國民に至るまで勤勉努力の精神に富み困難と戦つて屈せず、寧ろ進んで困難に當る。學問でも、軍事でも、商工業でも有ゆる方面に隆々として旭日昇天の勢を以て進歩して行く。獨逸の隆盛なるは是れが爲めである。米國のカーネギーや、ヒルや、其の他世界に於ける有ゆる名士は、

皆勤勉努力の人である。勤勉努力の精神を以て事に當つた人である。
 今や世界の生存競争は文明の進歩と共に日に月に激甚となつて来る。此の時に當つて之れと拮抗して其の優勝なる地位に立たんとするには、何うしても人々は必ず此の勤勉努力の精神を持つて居なければならぬ。今後の青年少年は常に自己の榮達の爲めのみならず、國家をして一層富強ならしめんが爲めに、必ず勤勉努力の人とならなければならぬ。教育家たるもの、父兄たるもの、宜しく此の大局に眼を注ぎ、勤勉努力の精神に富める健全有爲なる青年少年を養成し、極力勤勉努力の氣風を鼓吹すべきであつて、之れ宇宙の原則に適應する所以に外ならぬ。

第三節 強者と弱者

醉生夢死中の霹靂一聲

考ふれば人生程靈妙なるものはあるまい。動機は一つでありながら、其の結果に於いて非常なる差を生ずるものである。今日歐羅巴に於ける大戦亂は實に空前の大慘劇であつて、それが爲めに全世界を震撼し、日々幾百萬の人馬が戦亂の巷に馳驅しつゝあるが、此の結果は果して如何になり行くであらうか。

最初此大戦亂の開始せらるゝ以前に於いては、世の中は總べて經濟上の支配を受けるが故に、經濟的利害關係より戦争は決して起り得るものではない、戦争なるものは畢竟痴人の目に映ずる幻影に過ぎないと大言壯語して居た學者もあつたが、さ

りながら人生は決して斯るものではなかつたのである。果せる哉其の舌根未だ乾かざるに、歐洲の天地は砲煙彈雨の中に一大修羅の巷と化し、海に陸に世界大動亂を惹き起すこととなつたのである。

而して更らに戦亂の開始せらるゝや、凡て利害の打算より、此の戦争は永くて六ヶ月位のものであらう、獨逸は到底金の力に於て英吉利の敵ではない。前後に敵を引受けたる獨逸帝國は忽ち四境を封鎖せられ、其國民は上下を擧げて餓死に瀕し、カイゼルの末路は知るべきのみといひなされて居たのであつた。然るに戦亂の開始以來世人の豫想は大いに實際と異なり、獨逸は今や敵をして一步も己が領土内に入れしめざるのみならず、白耳義佛蘭西の方面は勿論露國の方面に於いても地圖上に劃されたる形式的の領域は全く變じて、實力を以て實際的の領土を劃し、ガリシヤ、ポーランド、埃太利洪牙利、續いては和蘭、白耳義、其の他佛蘭西に於ける地域に

加ふるに己がセルマンを合して、茲に大セルマン帝國を建設して居る有様である。

翻つて我が同盟國たる英吉利の状態を見るに、實に遺憾に堪へない感が興る。蓋し今より百年前、歐羅巴の天地を震撼せしめ、殆んど其全領土を蹂躪したるは、實に第一世ナポレオンであつた。實に彼れが馬を進むる所、歐洲全土は戰慄せざるものはなかつた位である。然るに此の時偶々英將ウエリントン、各國連合軍の力に頼り漸くにしてナポレオンを取り押ふるや、英人は上下を擧げて此の意外なるウエリントンの功名に驚くと共に、猛虎の如きナポレオンをセントヘレナの孤島に封じ込めた以來「ヤレ／＼之れで樂が出来る。之れからは手足を伸べて人生を樂しむとが出来る。人生の目的は快樂を全うするにある。而して此の目的を達するには、世の中が平和でなくてはならぬ。此の平和を得て人生の快樂を全うせしむることが、是れ文明の賜物である」と、表面には極めて都合よきことを唱へ、如何にも高尚ら

しく、優美らしく、以て快樂に憧憬れんことに汲々たる有様であつたのである。此の風潮は殆んど百年間を支配し、世は何時までも昌平の天下であつて、到底戦争などの起るものではない。人生は永久に斯くあるものと考えられてゐたのであつた。従つて其の文明は放漫にして、曾て有せし隆々たる筋肉は自然に弛緩し、緊張の精神も何時とはなしに消え去つて仕舞つた。現に戦場の巷に往來しつゝも、依然として婦人を忘るゝ事が出来ない。土壕の中にも酒の香が慕はしくてならない。三週間に一度は歸還休養を貪らねばならないといふやうになつたのである。本より英國人總べてが斯くありとはいはない。現に今日英人にして英國の現狀に鑑み、慷慨悲憤の涙に暮れて居るものも尠くない。然るに斯る憂國者が血涙を振つて慷慨せざるを得ざるまでに、情けなくも一般の士氣は弛緩を告げて居るのである。

日耳曼魂奮起の由來

之れに反して均しく第一世ナポレオンの鐵蹄に蹂躪せられたる北獨逸帝國の狀態は何うであつたか。獨逸が他の歐洲列國と共に、ナポレオンの爲めに手厳しく蹂躪せられ、非常なる艱難に遭遇したことは同一である。殊にエナの一戦には大慘苦に陥つて、殆んど堪ゆべからざる程の苦痛を嘗めたのである。而して其の結果彼等は何ういふ感じを起したてであるか。

彼等は終に思へらく「人生は強者に對しては如何なる憂目に遭ふかも知れない。力の爲めには如何なる慘虐の許に蹂躪せらるゝかも知れない。優勝劣敗は自然の狀勢にして、羸弱の身を以ては如何に齒ざしりすればとて及ばない。それ故人生は強味でなくてはならぬ。而して剛健勇武の精神を惹き起して再び此の憂目、此の恥辱

を受けるやうなことがあつてはならない、飽く迄此の屈辱の中より奮起して、人並といはれる地位に立ちて、更に進んで全天下に雌雄を争ふ地位に立たなければならぬ。勝つか負くるか、二つに一つの外はない。而かも祖先劣敗の恥辱は何んとしても忘れ難いから、飽くまで戦勝者の地位に立たなければならぬ」とは之れ獨逸國民に磅礴する一大決心であつた。

均しくナポレオンの鐵蹄に蹂躪せられたるにも拘はらず、一方に於いては極めて軟弱に、一向歡樂を貪る風潮を生じたるに對し、一方獨逸帝國は、飽くまで勇勝者の地位に立たなければならぬといふ一精神を喚起したのである。而して此の精神は宗教に、哲學に、藝術に、科學に、何れの方面にも深く沁み込み、茲にゼルマン文化的健剛なるゼルマン魂を作り成すに至つたのである。「人は憂患に生きて安樂に死す」とは、我輩の常に愛誦措かざる言葉であるが、實に人生の隆替興亡は全く之れ

に起因して居る。同じくナポレオン一世の鐵蹄に依りて茲に二つの花が咲いたのである。一つは優美安樂に、一つは剛健壯烈に。然るに此の二つの花は一毫千里、百年後の今日に於いて其の結果は茲に大衝突を惹起し、遂に今度の大戦争となつたのである。

然しながら之れは決して對岸の火災ではない。直ちに我が六千萬國民の頭上に落下せんとしつゝある刻下の状態である。

彼は五百年我は三千年

抑々獨逸帝國の今日あるは決して偶然にあらず、此の百年間に於ける苦辛經營の跡を尋ねれば實に容易ならざるものであつた。彼は今日世界の勇者として各列強を後へに墜若せしむる勢を有するが、其の君主たるホーヘンツォーレン家の事を考へ

て見ると、永久に亘る歴史の上よりいへば眞に一刹那ともいふべきものにして、ホーエンツォーレン家興つて以來僅かに五百年、プロイセン王國の君主として武勇を現はして以來二百五十年、遂に其の素志を達してゼルマン帝王の盟主となり、プロイスマン帝國の帝王となりしは、指を曲すれば今より僅か四十五年前のことであつた。然るに此の僅かの年代に於けるホーエンツォーレン家は如何なる事業を成し遂げたか、又プロイセン王は如何なる經營を爲したるか、彼は遂にゼルマン帝となりて、今日全世界の勢力を一手に引き受けて益々其の勇を現はし、殆んど人をして嘆稱措く能はざらしむる情況に立ち至つて居るのである。

去りながら顧みて我が國情を考ふれば、我輩は心密かに思ふのである。彼れも人なり我れも人なり、今日獨りホーエンツォーレン家をして天下に名を成さしめ、我れは指を嚙へて差し控ふべきものであるか。彼れに比すれば我が建國は既に久しき

に亘り、國家の基礎もゼルマン帝國に於ける聯邦の状態とは全くその品位を異にし磐石の如き鞏固なる地盤の上に立ちて、三千年に近き、連綿たる皇統を戴き、世界識者の理想ともいふべき理想的國家の根本を有して居るのである。然らば彼の爲す處我れに於いて爲し能はざる理由何處にかある。彼れが僅かに百年以來の星霜の間に於いて築き成したる帝國の基礎、四十餘年の日月を積んで雙手に天下の列強を壓倒して憚らざる處、此勇猛なる情勢を呈するに立ち至つたのは、煎じつひれば一片の意氣である。世に人間の意志程恐るべきものなく、奮發力程驚くべきものはなし。彼れが非常なる決心を以て、勇猛精進の意氣を以て、世界を併呑するか、然らずんば滅亡あるのみとの氣概を以て、上下を震撼せしめ、而して國民の氣風を一新し、遂に今日此の絶大なる事業を當に爲し遂げんとしつゝあるのである。其の情勢を見て、我れ亦た大和民族として數千年以來鍛へ來れる武勇の名を輝かしながら、それ

を汚して祖先に申し譯ありと思ふか。何んぞ此の時機に奮はずして可ならんや。人間威力の興起する所、意志の發する所、何事か爲し遂げ得ざるものがあらうか。之れに就きては更らに進んで其の原因を討究するの必要がある。

森林中に強者の福音

勇猛なる意志は決して偶然に生ずるものではない。その根柢に於て深き意志の鍛練が無くてはならぬ。深遠なる確信の下に立たずして不屈不撓の勇氣は生じて來るものではない。熱烈なる意氣を現はんとする前には、冷靜なる思想の鍛練が必要であり、鞏固なる決心を爲す前には、胸臆に深き確信が無くてはならぬのである。

土地は澆確にして氣候甚だ宜しからざる北獨逸、元來あまり天恵に富まざりし北獨逸帝國は、自然と闘ひ境遇に對抗する必要よりして、輕佻浮薄にして何事に對し

ても打ち捨て置くといふ如き曖昧優柔の氣風を許さないのである。その結果は何事に就いても徹底せずには止まない、貫徹せずには捨てない、己が心に満足するまでは如何なることをも攻究せずしては止まないといふ氣風が、深く彼等獨逸民族の心に透徹して、廣大無邊なる宇宙の心底までも穿鑿せざれば止まないといふ考へを惹き起したのである。

茲に於いてか百年以前に於ける北獨逸の鬱蒼たる森林中には、深く哲理に没頭する偉大なる哲學者を輩出した。即ちカント、フイフテ、シヨツペンハウエルの如きそれである。續いて藝術界にはワグネルあり、經濟界にはフロードリ、ヒリストあり、ツライツケあり、遂にニーチエに至りて精神界に於ける深刻の極點に到達し、續いてカンブレヒト、デリユーブルツク等現れ、何れも殆んど一身を捧げて、國民思想の陶冶鍛練に全力を盡した。其の結果獨逸人全體に於いて一種の國民氣風を胸

隠に深く建造したのである。

主義を争ふ學說の點に於いては種々なる異論の餘地もあらうが、之れを大體より通觀して彼等獨逸人は如何なる國民性を造り出したかといふに、彼等は實に宇宙の眞を掴まんとことに熱中したのである。然らば彼等はそれに依つて如何なることを自覺したかといふに「宇宙の眞は強みであり、力である。廣大無邊の宇宙の根柢には、善惡に超越したる力の大作用がある」と。彼等は萬有の根柢を強みに歸して深く徹底したのである。單に皮相の見解にあらず、一時の情勢にあらず、心の奥底より強みを自覺したのである。強みにあらずんば大事に徹底しないことを能く理解したのである。

然るに獨逸帝國を以て軍國主義なりと解するは皮相の見解である。軍國主義となりしは全く結果であつて、其の根柢は文化を基とし、ゲルマン魂を基として居るの

である。それ故哲學に於いても彼れは一種の深奥に達し、其の他政治、法律、經濟藝術、工藝等は勿論、力の最極點の發揮たる軍事に其の鋒鏘を露せるは當然のことである。單に軍事の一方面より見て眼その根柢に達せざるものは、書物を讀みながら眼光紙背に徹せざるものである。之れを煎じつむれば意志の鍛鍊であり、確信であつて、此の強力なる確信を以て建國の基礎を確立すると共に、萬般のことは悉く之れから割り出されて居るのである。之れ即ちゲルマン民族の統一される思想であり國民的思潮である。恰も總べての星辰が北斗を中心とせるが如く、上は君主より下は一兵家まで、上は偉大なる學者より下は工場に働ける一労働者の末に至るまで、知るも知らぬも知らず識らずの間に此の國民的方向に向ひつゝあるのである。

長夢忽ち覺め驚愕狼狽

英國の博士クラムは深く自國の現狀に憤慨し、英人に對して甚深なる覺醒を與へて居るか、其の言葉の中に、「獨逸人殊にその青年者の胸中に漲りつゝある思想は、勇猛邁進の宗旨である。活動を以て榮譽となし、英雄的行動を以て男子の本懐と心得、一大事業を建造するとを以て人生の最大目的として居る。而して之等の意志、目的、行動は何事に對しても貫徹せずしては止まないものである。我々英人が紳士々々といはれて居たのは、實は形式の上のみであつて、型ばかりに馳せて世間體を繕ふ一種の見榮坊か、さもなければ虚偽の外には出なかつたのである。我々が虚偽の世間體にあこがれつゝあつた間に、彼れ獨逸人は眞に到達せんことを期して居たのである。顧みれば我々の行動は畢竟偽善であつた。我々が金錢の間にさへ迷うて居る間に彼れは質實剛健の精神を養ひつゝあつたのである。あゝ我々は誤つて居た。我々は自由といふことにのみ深く憧憬して、個人の希望自由を全うすることが人生

の幸福なりと考へ、民主政治と口々に稱へて居る間に、實は危険の身に逼れることを知らなかつたのである。戦争が已に足元まで近づいて居たにも拘らず、其の危難さへも夢想することが出来なかつたのである。此の百年間を醉生夢死の間に日々過して居た間に、今日となつては實に既に取り返しつかない場合に遭遇したのである。彼等獨逸人は一面に於いて、勇敢なる英雄的行動を實際的に大ナポレオンに依りて教訓せられ、一面には深刻なる哲學者ニイチエに依りて、英雄的行動や勇武なる行動が遂に神に代り得べき超人間とも成り得べきことを説明せられたのである。不肖ながら自分は、數年以來獨逸人の將來に就いて幾度ともなく世人に注意したが、時人をして耳を傾けしむるまでに至らなかつたことは、只己が身の不肖を恥ぢる外はないのである。さりながら今日の情勢を見ては實に慨嘆に堪えない」云々と、斯る意味に於いてクラムは屢々述べて居るのである。

大正以來の國情如何

更らにベルンハルチーは其の著書中、國民思想に就いて説きつゝある一説に、獨逸人を激勵せんが爲めに下の如きことを述べて居る。即ち「自分は日露戦役に就いて實に偉大なる教訓を受けたのである。今日までは世界の大国として武を以て天下に鳴り亘り、殆んど何人も一指を染むることの出来なかつた強大なる露西亞に對して、蕞爾たる日本が猛烈なる戦争の終りに此の大敵を打ち破つたに就いては、實に不可思議の感に堪えなかつたのであるが、さりながら其の由つて來る所を探究すれば、事は決して偶然ではなかつたのである。抑々日本人たるものは、實に祖先以來尙武を以て立國の基礎となし、武人的魂を以て全國に通じたる國民性と爲し、幼少の頃には家庭に於いて兩親始め親族のものより、常に尙武的氣慨、武士的氣風を以

て搖籃の中より訓育せられ、漸く長じて小學校に通學するに至るや、教師は父母に成り代り同様の氣風を以て兒童を訓育陶冶するのである。遂に長じて各種の事業に就かんとする者も。其の胸臆には深く此の思想を植ゑつけられて居たのである。更らに進んで戰場に立つ一兵卒となるもの、況んや之れを率ゆる將校主將ともなれば、根柢深く鍛鍊されたる此の思想を以て活動するのである。如何なる強敵に對しても祖國の爲め、上君主の爲め、勝たずして止むべきかとの一大決心は、此の民族の凡てに横流しつゝあるのである。斯かる氣慨氣風を有する國民性である以上は、如何に強大なる露國も之れに對しては、一敗地に塗るゝが如きに立ち至つたのは、決して偶然ではない、之れ全く日本人が尙武的氣風を以て養成されつゝあつた結果である」といつて居る。

我輩は之れを讀んで實に流汗淋漓たらざるを得なかつたのである。今更ら賞めら

れて甚しき苦痛を感せずには居られない。日清日露の戦役の際には確かに其の通りであつた。人も斯くいへば我れも斯く考へて居たのである。先年我輩が遞信次官の頃歐米を漫遊せし際は、恰も日露戦役後久しからざる時であつたが、到る處にベルンハルヂーと等しき言葉を聞いて、我輩自身にも亦胸中には一種の誇を感じたのである。

然るに先帝御崩御以來、大正の今日に於いて果して我が國民性は如何であるか。如何なる點に向つて進みつゝあるか。一英人クラムが英國の現狀に慷慨して悲痛の言を爲すは、決して英國國民に對する痛棒たるばかりではなく、我國に於いても亦心あるものは今日の我が國民性を見て、果して慨嘆の言葉を發しないものがあるであらうか。

第四節 眞の強者

現代要求の根本思想

宇宙間の一大鐵則より之をいふも、又この鐵則の發現せる刻下の世界的な大勢よりいふも、現代に處するに就いては、國家としても個人としても、強的思想を以て立たざるべからざること、是れ幾度びか前來繰返へして述べた通りである。我輩は之れを以て我が國に避け難き現代の要求にして、此の要求たるや現在未だ差し迫らざる如く考ふるは非常なる誤りにして、何うしても斯くならざるべからざる運命の下に置かれ居るのみならず、現在已に此の必要に迫られつゝあることを深く信じて疑はないものである。

萬有の眞理がその根柢に於て、全く強みに基するは争ひ難きことであるが、抑々

此の強みなるものは、如何にすれば之れを深く胸臆に含蓄せしめ得るかと云ふと、之れを個人としての修養の根本に置くことに依つて得られると思ふのである。人は誰しも強みを望まぬものはない。然るに強みを望みながら實際に於ては兎角それを缺いて、所謂薄志弱行に陥ると云ふのは何故であるか。剛健の氣風、剛健の思想を有せねばならぬとは考へつゝも、兎角その思想に動搖を來して、薄弱なる意志の爲めに思ひの外に走り、遂には抜き差しならぬ立場に立つて見たり、或は常に心にはそれと感じつゝ、知らず識らず墮落の淵に投ずるに至るのである。然しながらそれ等の人々と雖も、心の中には決して之れをよいことに思つて居るのではない。矢張不安の状態にあつて、心には何となく濟まないやうな感じがしてゐるのである。

目前世上に於ける種々の状態を見て、ア、云ふ方法でも身が立つ、カウ云ふ遣り方でも成功すると、種々劃策して見るものゝ、常に不仕合せな境遇に墜ちて、甚だ

面白からぬ状況に立ち至るのである。そこでその一刹那に之れでは詰らない。今日まで遣り來つたことが一向にその結果を奏しない。然るに世上を見れば意外の事に依つて成功したものもあり、或は終世快樂に快樂を重ねて身を果たすものもある。それを我が身に比べて胸中には甚だしき疑惑の念を生じ、こゝに思想の動搖を來して、我れながら何處に安定してよいやら、何處に定住してよいやら、確然たる據り處なくして遂に煩悶苦惱となりて心身を衰耗せしめ、巍然たる精神、剛健なる思想は何時とはなしに消散して仕舞ふが、此の例は決して世上に少なくないのである。況んや生存競争は日一日と激しくなり、生活の問題は刻々困難となるに就ては、外より迫る此の事情が、益々内的思想に於て種々の煩悶苦惱の誘因となるのである。我輩は世上是等の少青年の身の上にて考へれば、實に深き同情を持つのである。何とか之れに對して前途に光明を與へ、世の中は決して左様のものではない。

思ふ程苦患のものではない。困難のあるものではない。假しや苦患困難が目前に簇集し來るとも、何等畏懼することなく必ず之を踏破して心境裏に一新天地を打開せねば止まぬとの感じを持たせなくてはならないと覺悟して居るのである。

之れは決して我輩の空想でもなければ、又空理を説く者でもない。各種の書籍を讀破する際にも深く感ずる處であり、況んや我輩自ら少年の頃より實行し來つた確信である。打ち開けて云へば、我輩自身すらも幾度びか誘惑に陥らんとしたのである。凡そ誘惑の手は諸方より隙隙を窺ひつゝあるが、最も猛烈に襲ひ來るは少青年の頃である。世上富有の子弟が何の仕合せか、只譯もなくその日を送り、或は父祖の力、親戚の力、その他種々社會上の關係の爲めに、何等努力することもなく又何等奮勵することもなくして、徒らに好地位を占め、世上に虚榮を衒ひ、人又たその外形の爲め切りに阿諛の言葉を呈し、限りなき羨望の眼を睜るのである。之等を見

れば年少の身には自然人の幸福を羨み、我が身の不幸を歎ずるに至るのである。

前途の光明無限の希望

少年時代の我輩は元より今日の如く思想は熟して居らなかつた。否今日と雖も熟したりとは思はないが、當時は今日信ずる程に固い確信は持つて居なかつたと思ふ。然しながら何處となく胸中には一種の信念を有し、何となく前途には大なる光明を認め、限無き希望のつながりを有して居たのである。而かもその希望は達し得られないことはない。必ず達し得らるゝものであつて、今日自分が羨みつゝある人々をして、必ず見返へさせるだけの事はして見せ得ると確信して居た。

元來我輩は早くより父を失つて、唯だ一人の母の手で育てられた我が身には、母の存在中に必ず此の目的を達し、以て母に慰安を與へたいと云ふ決心は、茲に鞏固

なる意志と極めて濃厚なる情味とを加味し、假令困難の中に在りても、胸中には實に春風の如き想ひを爲し、前途は赫々たる光が耀いて居るものゝ如く感ぜられた。日々の苦痛も困難も我が身に取りては何等の苦惱を覺えず、その苦難に對して努力しつゝあることが、纏て母に對する一種の慰撫となり情味となりて、それが心よりの孝道であるやうな感を起したのである。我輩の身の上に慈愛溢るゝばかりの母ありしは、索莫たる行路難に一種暖かき情味を與へ、情想の上に何等の餓を感ぜしめなかつたのである。然のみならず此の結果は凜然たる勇氣となり、斷じて家名を汚さず、仲小路廉なるものあることを天下に知らしめずしては止まぬと云ふ一大希望を前途に抱かしめたのである。

之れをホーヘンツォーレン家の獨逸帝國興隆との關係に比すれば、その懸隔は元より比較とならざる程の差ではあるが、一身の存立一家の經營を擴大すれば、茲に國家の經營國民の存立となりて、その眞意義に於ては決して相違はないのである。而して獨逸帝國の興隆の跡を観察するに、我輩の發憤努力の經驗と甚だ相似たるものあるを認めて、今や敵國ながらも、獨逸國の興隆史には特に興味を感ずるのである。

人生には強みを要す。而して強みの發露は勇氣である。勇氣はその根柢に於て確信なくして起るものではない。剛健なる精神を養ひ、奮闘努力に堪ゆる勇氣を養成するには、胸臆に深き確信がなくてはならない。我輩は敢へて宗教を云々するものではないが、さりながら前にも述べし如く、此の宇宙間には、儼乎たる一大鐵則が存在して居て、その威力は如何なる點にまでも及ぶと同時に、嚴正なる賞罰を加へつゝあることを確信して疑はないのである。

過日或る人から非常に面白いと云つて贈つて來た書物がある。それは獨逸人ザル

ツマンの「宇宙觀」である。彼れは今より百年前の人であるが、世の中を實によくよく見渡して深奥なる學理を極めて平易に説いて居るのは感服の外ない。而して彼れの思想は獨逸人の思想の根柢に多くの培養を與へ、平易の中に非常なる信念を齎らしたのである。今簡単にその概要を左に述べて見よう。

儼乎たる天道の確信

人は唯だ信ぜよ、確信せよ、宇宙間には大なる支配力があると共に、世の中には儼然たる正邪の區別あり、眞賞必罰は動かざるものたることを信ぜよ。併し單に斯く云つて見ても人は中々之れを信ずることは出来ない。時として世の中の事は賞罰甚だ嚴明ならざる如く見えて、自然の制裁も甚だ當てにならないやうな感じがして來る。然しその當てにならないといふ感じの起る刹那が、最も恐るべき誘惑の入り易

い處であつて、悪魔は此の間隙を狙つて誘惑の力を振ふのである。東洋の言葉でいへば、天道是か非かといふ如き嘆聲を發せしむるに至るのであるが、さりながら之れは全く時間を見ない、經過を見ない、唯刹那の間を見て直ちに斯く思ふので、茲に時を與へ距離を與へてロングランに暫く經過を眺めたならば、因果の關係は儼乎として存在し、その結果は必ず靦面に現はれるのである。之は實に寸毫疑ひなき處であつて、之れ程明白なる裁判官はない「云々と、彼れは種々の例證を擧げて、大なる威力の支配は寸毫の誤謬なきことを極めて面白く説明して居るが、實にその通りであると思ふ。

我が現在の狀況に於ても、此の近き年代に幾干の人々が獄中に投ぜられて居るか、一時は要路の大官として世の美望の的となり、或は富豪として一世に高飛し、政治界に財界に殆んど飛ぶ鳥をも落すが如き勢なりし者が、大正以來幾人となき獄

底に投ぜられて居るが、之等の人が政治舞臺に、事業界に、盛なる威力を奮つてゐた際には、多くの人々は之れを以て非常なる成功の如くに考へ、往々その手段の甚だ當を得ざることを考へながらも、一時は假相の成功に眩惑されて、ア、いふ手段でも遣れるものだ、餘り窮屈に固苦るしいことばかり云ふのは野暮な話だと考へ、甚だしきに至つてはそれが當世であるが如くに考へるに至つたのである。

さりながら斯かる人は數年ならずして着々破綻を現はし、昨日の榮華の夢は今日獄中の悲哀となり、昨日までは社會に翱翔してゐたものが、今は何處に何うなつたやら、殆んど行衛も知れなくなつたものも少くないのである。世人は之れを見て、成程是非の制裁は強きものである。正邪の判断は争ひ難きものであると云ふことを、幾ら實際的に感じたであらうか。事が斯くの如く落着し、その結果が斯くの通りに顯はれて來れば、人は始めて天道の畏るべきを知り、何物かは知らないけれど

も、その間に儼乎たる支配をなしつゝあることを感知すると共に、茲に始めて戒心恐懼の念を發し、成る程不當の事柄は不當となり、不正の事柄は遂に不正に終ると云ふことは争ひ難きものであると知つたのである。

事柄の現はると顯はれざるとに拘はらず、徹底したる心眼を持つてよく、未然を察し、必然到來すべき因果の道理を信じて、強き確乎たる信念を胸中に貯へなければならぬ。若し此の信念なくんば決して勇往邁進の意氣は生じて來ない、艱難辛苦に打克つて如何なる誘惑をも打ち拂ひ、一路前進前途に大なる希望を有する譯には行かないのである。

個人と社會及び國家

宇宙の間には儼然たる一つの偉大なる支配者が現存し、如何なる力も對抗し得ざ

一大鐵則が儼乎として存在せるが故に、人は之れを畏れ、之れを信じ、之れに頼り、以て鞏固なる確信を胸中に有し居らざるべからざると同時に、又此の確信を有することが非常な強みとなることは前述の通りである。

更らに進んで、此の宇宙の現象たる我々の社會的關係、共存の状態、續いて國家の状態に考へを及ぼすことが大切であらうと思ふ。我々は個人々々として銘々に意志を有し、而して自己の一身は自己の思ふがまゝに處置し得べき筈である。去りながら、人は到底孤立單獨にて此の世を渡り得るものではない、必ず意志を同じうするもの、感情を同じうするもの、言語を同じうするもの、風俗習慣を同じうするもの、相集り相協力して共存の實を擧げ、共同的團體の健全なる發達進歩を圖り、茲に各自共同の意義ある目的を遂行する爲めに、努力もし盡瘁もしなければならぬので、之れを煎じつひれば畢竟銘々自己の爲めだと云つてよ。

然るに茲に最も微妙にして量るべからざる感じの起つて來るのは、即ち社會的現象、團體的現象、乃至國家的現象ともいふべきものである。人相集りて團體を形づくり、その團體が遂に國家となるに及んで、茲に我々各人はその團體を形づくれる一分子であり、國家を形づくれる一部分である。銘々は銘々の意志を有してゐるから、自己の考へ通りに一身を處置してよき筈なるに、茲に自己とは全く相離れた一つの大きな特別の意志が存在して來るのである。即ち團體的意志、國家的意志であつて、國家なる一團體はさも特別に有形の一人格を備へて居るやうに、國家なる一人格は自らの行動を爲し、自ら各種の處置を執るのである。即ち國家は國家自身に健全なる發達を望み、健全なる進歩を望み、益々その意志を擴大せんとするのである。

斯かる國家は所謂有爲なる國家であつて、苟くも國家を形づくれる以上は、何れ

も斯くの如き考へを以て進まなければならぬ。而して世に斯かる一人格が實在しつゝある以上、その人格は恰も個人と同様に、自己の健全を害し、進展を妨ぐるものあれば、決してそれを捨て置かないのである。若しそれを捨て置いたならば、自然々々の間に自己の組織は破壊され、自己の發達進歩は阻害さるゝが故に、國家なる一人格は人格自身の目的を達する爲めに、決して之れを容赦しないのである。即ち自己の存在發達の爲めには已むを得ないとして、茲にその必要とするだけの荒療治を試みるのである。而して之れが國家の内部的自衛の方法であつて、國家自らを健全ならしめんが爲めには實に已むを得ないのである。

尙ほ之れを細言すれば、國家を組織せる細胞中に不健全なる細胞あるか、或は病的細胞が存在して居るとして、その病的細胞が益々他に瀰漫し、不健全なる細胞が愈々跋扈を極めて、遂には全體を腐蝕せしむる如きことがあつては、それこそ國家

自身の人格に取つて容易ならぬ事であるから、之れを黙視しないと云ふのは當然の事である。又斷じて之れを黙視せずと云ふが如き威力ある國家であつてこそ、所謂剛健々全にして何處までも進歩發達し得る國家と稱すべきである。それと同時にその國家を形づくれる剛健且つ善良なる細胞は、又細胞各自も此の點に對して奮闘努力し假りにも不健全なる細胞、病的細胞をして跋扈跳梁を恣まにせしむる如きは、斷じて許さずと云ふことになるのは當然の事である。

大鐵則と國法の威力

こゝの道理をよく考へて見なければならぬ。國家を組織せる所謂健全なる細胞、剛健なる細胞に屬する人々は、己れ自らの存在の爲めにも、國家なる一大人格の健康を保持する爲めにも、決して不健全なる細胞、病的細胞をして恣まゝなる舉

動をなさしめ、跋扈跳梁をなさしめてはならないと云ふ感じの起るは當然である。之れを個人としては國家的思想と稱するも、その集團思想は個人より超越したる一人格を備へたる國家の意志となるのである。即ち此の點より考ふれば、人々は國家的意志を備へ、又國家の爲めに考へを勞しなければならぬことは、誠に當然の事である。之れを他人の事と考へ他事の如く見て、何等我れに直接關係なきもの、如く考へ、自己は自己の考へを以て随意の行動を執り、國家の事は何うにかなるであらうから、誰か盡力するものに任せて置いてよいと云ふ筋のものでないことは明らかである。

世の中には、人生僅か五十年、後は野となれ山となれ、太く短かく世を渡つて、思ひのまゝに日を過すのが寧ろ氣まゝであると、随分勝手氣儘のことを云ふものもあるが、然し宇宙の關係は何事も單獨に行くものではない。凡ての關係は悉く他に

及ぼすものである。況んや茲に一家を形づくり一國を形づくれる以上は、我が身にして我が思ふまゝになると考へるのは非常な間違ひで、善惡共に悉く他に影響し、他に反應して、その結果は引いて全體の覆没を來たすものである。それ故かゝる事が他人の事として捨て置かれやう筈がなく、左様な我儘勝手の舉動から他に及ぼす悪影響は、斷然之れを默視することは出來ないのである。之れが國家なる一人格の意志であり、強要する威力である。

茲に於てか人は實に恐れても恐れなければならぬ。如何なるものと雖も、國家なる一大人格の前には屈伏しなければならぬ。宇宙の間に於ける鐵則は、直接に見えもしなければ聞えもしない。さりながら既に國家となりて現はれて來る以上は、其一大鐵則は最早や目に見え、耳にも聞えるまでになつて來て居る。之が即ち今日の國法制度であるが、猶ほ目にも見え耳にも聞えざる國家的國民的大法の犯すべ

からざる威力あることをも感じなければならぬ。是等の點より能く考へて見れば、世の中には可笑しなことは出来ないものだ、無理なことは出来ないものだ、人が變に思ひ奇怪に感ずることは斷じて出来ないものだと言ふことは歴々として世上に現はれてゐるではないか。今日は最早如何なる人と雖も、個人の力は到底國家の意志に反する事は出来ない。國家なる一人格が變だと思ひ、無理だと思ふことは、斷じて出来ない世の中になつて來たものだと思はなければならぬ。

深刻なる人生の慘事

以上は、客觀的には宇宙に一大鐵則が存在し、國家に一大意志があつて、之れに逆らふことは逆も出来ないといふことをいつて來たのであるが、更に今度は觀察の方法を變へて、人々銘々主觀的に考へて見たならば、茲に又人類として實に靈妙な

る作用があるのである。

近頃屢々世上に起り來る事柄であるが、彼の所謂自殺程奇怪なるものはない。宇宙に於ける多數の動物中、自ら悲んで自殺すると云ふのは人間のみであつて、未だそれ以外に自殺を爲すと云ふものはない。自らの身體を自らの意志を以て殺すと云ふのは實に非常なことである。己が考への爲めに己が身を殺すと云ふのは、假令誤れるの甚だしきものではあるが、その勇氣たるや容易の事ではない。自己の考へ次第、自己の意志に依りて苦痛を苦痛とせず、自ら身を害し自ら身を捨てるとは、實に誤れるも亦た甚だしと云ふべきであるが、人間の精神と意志の強さは此の點でも見ることが出来る。然しながら只その方向を誤らずに、その方針を變へて呉れたならばと我輩は泌々と思ふのである。殊に青年の自殺を聞く度びに一層此の感を深くするのである。彼等は之れ程の考へを持ちながら、何故その方向を誤つたか、何

故心機の一轉を試みなかつたか。同じ強みを有しながら、何故その強みを他に轉じなかつたかと、之れを憎むと云ふよりも、實はいひ知れざる同情を催すのである。

更に進んで觀察するに世の中の事物は之れを主觀的に見れば、何事も己が心の思ふ通りである。世事は全く思ひなしてである。己が心程靈妙なものなく、機敏なものはない。人の知ると知らざるとに拘はらず、先づ感ずるものは自己の心である。

世の中には金殿玉樓に住ひ、物質上に榮耀榮華を極めつゝ、何等の憂ひ何等の痛苦もなささうであるのに、夜な夜な煩悶苦惱して夜の目も靜かに眠ることの出来ないものゝあるのは、世上決してその例が乏しくないのである。疑心に暗鬼を生じて、身は殆んど深淵に臨むが如く、寸時も心の安さを覺えず、戦々競々として尾花の末にも疑懼の念を生じ、最愛の妻子、最も親しき友人までも己が心の苦しみの爲めに、悉く讎敵の様に見ゆるのは何の故であるか。客觀的物質的の上には何等の事も

なきに、獨り己が心の中に、いふにいはれぬ煩悶苦惱を懷き、遂に全く立ち行く事の出来ない感起すのである。之れを所謂己が罪業己が身を攻め、生きながら苛責の苦しみに陥り、皎々たる天日をも拜することが出来ないのである。何の悲惨か之れに如かんや、世の中に之れ程苦痛のものはあるまい。恐るべきは實に人生である。世に寢醒めの悪いといふことほど、深刻なる責め苦はないといふのは此の故である。されば是等の點よりして、よくよく考へて見よ、世に虚偽の成功なるもの果して幾何の價があるか、虚偽の成功なるもの果して幾何か己が身に快樂を與ふるぞ。將來社會に身を處して、社會人類の進化幸福に貢献せんことを期する青年が、先づ省察熟慮すべき點はこゝである。仰いで天に耻ぢず、俯して地に耻ぢず、千萬人と雖も我れ往かんの強者生活の味ふべき點はこゝにある。

第二章 強力論

第五節 優勝劣敗

勝か負か二つに一つ

我輩は處世上常に斯ういふ考へを有し、且つそれを實行することを期して居る。

「人類は勿論のこと、苟も生きとし生けるものは、總て優勝劣敗生存競争の理法から離れられぬものであつて、畢竟するに世の中は勝つか負けるかの二つに一つを免れない。」斯ういふ確信を抱いて、萬事萬物に對し必勝を期することを處世上の主義として居る。我輩は生來負けることが嫌ひで、如何なる事に對しても勝たなければ止まぬといふ決心を以て努力を怠らない。單に人類社會の競争に對して必勝を期する

のみならず、人類と自然界との關係に對しても、之に打勝ち、之を征服して、以て人類の用に供せなければ止まざる努力が、是れ文明進歩の意義に外ならぬと思ふ。世に殖産興業と云ひ、富國強兵といふも、畢竟人類の精力を盡くし、智力を竭くし、以て自然界に打勝つた獲物に外ならない。故に苟くも人が此世に立つて、多少なりとも其の頭角を現はすものは、その範圍内に於て其周圍に打ち勝つた人でなければならぬ。その現はす頭角が高ければ高き程、打勝つた範圍が廣大であつたのである。

故に何人も如上の確信にありて、相當に奮闘的力量あるものであれば、必らず相當に頭角を現はすべきことは、我輩の經驗上必ず間違ひなきことを言明する。我輩の如きは未だ社會の競争場裡の勝利者であると稱するほどの經驗はないが、從來の狭い範圍の競争場裡に於ては、この確信が我輩をして聊か勝利者たるを得せしめ

たことは少くなかつた。我輩が東京地方裁判所に初めて検事となつたのは、二十四歳で、同僚中で最下級であり又最年少者であつた。當時謂ゆる年少氣鋭、元氣横溢、性癖の負け嫌ひが、當時は最も猛烈であつた。考へると随分亂暴なことで、我輩は先づ四圍を平定せんとする野心を起し、同僚中の苟くも手に立つ者に對しては議論を吹きかけて、相手をして屈服せしめなければ止まなかつたのである。同僚ばかりでなく、上役に對しても同様に、議論にかけては少しの遠慮する所もなかつた。官制上の地位の上下は止むを得ないが、議論では地位の上下を眼中に措かず、常に内部に止まらず、法廷に立つても對手を屏息せしめざれば止まず、火花を散らして戦ふを辭さなかつた。常に斯ういふ意氣込みで他に對するのであるから、其裏面の苦心は亦非常なものであつた。法律論や其他の議論で相手に勝たんとするには、負けぬだけの研究は十分に積まなければならぬ。學理的研究は勿論のこと、事實に就

ても充分に調査し、何れの方面よりも、如何なる議論を以てするも、自説は決して破壊されぬだけの準備を爲し、動かすべからざる立場の上に立つて居なければならぬ。萬一法廷で主張が通らなければ控訴もする、上告もする。それでも負けなければ社會に發表して識者の是正を待ち、如何にしても其の主張を貫徹するに努力したのである。

我等の負け嫌ひの性分は、馬鹿々々しいことであるが、宴會の席場にまでも發揮した。自分は體質上酒量に乏しいのであるが、席上負けるのが嫌さに、随分酒を被つたこともある。紅葉館の大廣間に行く毎に想ひ起すことは、同僚と共に此所に淋漓として痛飲したことである。翌日は岑々と頭が痛みながらも、忍んで法廷に出た位であつた。

四圍を平定する決心であつたから、無論敵も出來たであらう。併し我輩は其の信

ずる所に勇往邁進した。此の間にあつて我輩の最も敬服せしは清浦奎吾子である。何となれば人にありては餘り斯様な人物を好まぬものであり、況んや我輩の亂暴は、當時の長官たる清浦子に迄も矛を向けたことは少なくなかつた。然るに清浦子は當時司法次官であつて、我輩を憎みもせず却つて種々なる便宜を與へられた。議論で同僚を屈服せしめ、法廷では辯護士と火花を散らして論戦したので、却つて何時とはなしに重大事件が起る毎に「仲小路にやらせよ」といふ風になり、検事正も検事長も我輩を選抜して「貴様やれ」と命令せらるゝに至つた。年少最下級の検事であつた我輩は、斯くして重大事件の起る毎に總べて受け持つことになつた。斯く重要問題に當ることは光榮ではあるが、實は重大なる責任がある。選拔者に對して其の明を辱むることは出來ず、又其問題に對しても出來るだけの努力をせねばならぬ。或は夜を徹して研究し、或は論文を起草するとか、裏面の苦心は非常なもので

あつたが、幸にして職務を成し遂げれば責任を完了し、世の喝采を受けるので、益々努力し益々奮勵した。斯うして一ヶ年間に六回も昇進し、下級者が却つて上級に進んだことがある。

其の後控訴院検事となり、更らに司法省參事官となつた。參事官は陸軍の參謀本部の如く、司法省では最も重要な位地である。従つて多數の判檢事中より最も秀ぐれたものを拔擢するのであつて、我輩の如き大學の課程をも履まぬものが、秀才を集むる地位に進み得たのは、畢竟勇勝劣敗、生存競争の理法を遵奉して、必死に奮勵努力した結果に外ならぬ。尋いて改正條約實施委員に任命せられ、又遣外法官九人中の最年少者として留學するに至つた。

斯く我輩が同僚の間に多少なりとも頭角を抜き得たのは、前にも述べた通り負けることが嫌で、何事にも必勝を期し、人が學問するといへば、自分もそれに劣らぬ

丈の學問を爲し、人が歐洲に留學するといへば、自分も留學せんとし、人が辯論に巧なりといへば、自分は之れに勝らんことを努力し、人が書に巧なりといへば自分も亦之れに劣らざらんとし、常に人に勝つことを期して居つた。己れの技倆能力が人より後れて居ては口がさけぬ。何處までも人に後れぬだけの修養を積み、資格を保有することを常に努力した結果である。

敗者轉禍爲福の用意

世の中は優勝劣敗の理法が最も鮮かに現れて居る。故に一面に勝つものがあれば、他面には幾多の悲惨する戦敗者のあることを知らねばならぬ。洵に無残なやうではあるが、併し之れとても致し方なき次第である。現に我輩とても今日迄で多少は勝ちたることあれども、又敗れたことも尠くない。勝つたものには勝つだけの理由が

あると共に、負ける人には亦負けねばならぬ理由がある。決して偶然に起ることではない。されば若し負けたからとてそれで他人を恨み、他人を憎むべき理由はない。他人を恨み憎むが如きは、失敗者をして益々敗勢の深みに投げ込ましむるに過ぎぬ。斯る場合には人を怨むにも及ばぬ。人を憎むにも及ばぬ。深く自ら省み、自分は何故に敗れたか、他人は何故に勝ちたるかを冷静に研究し、自ら責むるが至當である。深く自ら反省すれば、負けたのは何かの點に必ず不行届きの事があつたのを發見するに相違ない。而して、「ハアあの事が悪かつたのだな」と自分に思ひ返すことがあるであらう。反省して此の事に氣が就きさへすれば、不行届きの點あるも、深く用意して過を再びせざる様になり、又「ハアあの點が悪かつたな」と思へば、銳意して之が改善に努力するに相違ない。こゝに氣附けば、一旦は負けても再び三度び負けるやうなことはせぬ。此處が即ち己れに省みて其の足らざる所を補ひ、戦敗の經

験によりて戦勝の結果を買ふ所以にして、古來の名相名君が屢々禍を轉じて遂に福となし、最大勝利の光榮を荷ふに至るのも之れが爲めである。名將と凡人の分岐するは唯だ此の一點に歸着する。名將は幾多の戦敗に逢ふも之れを意とせず、常に之れを自己の經驗として活用し、遂に最大なる戦勝の光榮を得るのである。之れに反して凡人は一度び負ければ最早や再び立つ能はざるものと思ひ、藻騒きに藻騒き、而して益々戦敗の深みに陥りて無殘の最期を遂ぐるのである。

又勝つことは愉快であり、負けることは不愉快である。併し斯く思ふものは實は未だ勝敗の數に明かなるものとはいはれぬ。勝つといふ裏には負ける萌芽を備へて居る。負ける裏には勝つ萌芽を備へて居る。故に勝つたというて愉快を感じ、心に驕るやうなものであれば、其の裏面に萌せる戦敗の芽が直ちに増長して、敗北の禍を招き來すのである。言はゞ勝つて驕るものは到底勝味を味ふことが出來ぬもので

あり、又負けて勇氣の挫折するものは到底勝味のないものである。即ち勝つて驕らず、負けて挫折せざる人にして始めて勝敗の妙味を味ふことが出來る大人物と稱して可いのである。此の性格を有する人にして遂に絶大の偉業を成し遂ぐるのである。

豊臣秀吉は「勝つと思へば勝ち、敗けると思へば負ける。勝つも負けるも心次第なり」といつて居る。實に名言であると思ふ。秀吉は別段學問をした人とも思へないが、其の天稟に加ふるに千軍萬馬の間に往來した經驗を以てしたので、自然に知らず識らずの間に其の言ふことが哲理に合致して居るのである。實踐躬行より得來つたものと思はれる。勝負は心次第といふことは人生の微妙なる點を言ひ現はしたもので、此の一心あれば即ち勝つことが出來る。秀吉が絶大の英雄なるは此の所に存し、此の心境あればこそ洒々落々として、あの大事業を完成したものだと思はれる。

萬人必勝の根本要點

過般我輩が圖らずも、農商務大臣の重任を辱うした際に、郷里同藩の人々は我輩の爲めに大いに之れを喜ばれ、特に祝賀會を開きて、

故郷の、庭に草木は多かれど

高く聳えし君にもあるかな

いやましに、君は榮えし君のみか

故さと人のほまれなりけり

といふ喜びの歌を贈られた。其の好意は今も我輩の衷心より深く感謝に堪へぬ次第であるが、其席上に於いて、我輩は次ぎの如き意味の謝辭を述べた「今の郷里の諸先輩を始とし、學生諸君まで斯く多數にお集りになり、我輩が今日内閣の末班を汚

したのを非常に喜び下さることは誠に感謝の至りである。御話中には我輩が誠に幸福の身の上にあるやうに仰せてあつたが、我輩は世に自分ほど不幸なものはないと思つて居る。生れた時は劍戟閃く戦争の最中であり、母は自分を懐にして非常なる艱難を嘗められた。而して十一の歳には父を亡くし、十五の歳には兄を亡くし、天地の間に母子二人蕭然たるものであつた。只だ母は自分を頼みとし、未だ年若き身であつたに拘らず、又人の勧誘切なるものあつたに拘らず、之れを排除して再嫁再婚を辭し、一身を擧げて自分の爲めに盡された。其の深き情に對し、何とて報いずして止むべきや。自分は年少の時より斯く決心し、何うかして己の身を立て一家の名を揚げ、多少なりとも國家に盡し、以て一は母の鴻恩に報ひ、一は男子の本分を空うせざらんとする念を起し、爾來身を責め己を責め、人一倍の辛苦と、人一倍の艱難とを経て、遂に一通りの成業を遂げ、外遊もすれば留學の目的も達し、人

並に後れぬだけの學問を修むることが出来、今日郷黨の諸君より斯く盛大なる御喜びに預ることになつた。甚だ幸福の身の上の様ではあるが、實をいへば不幸の賜である。人一倍の艱難苦痛にも出遭ひし爲めに奮發も致したのである。今日諸君の御喜びを受くるに至つたのである。我輩は此の御宴會に對し、深く御好意を感謝するが、我輩一個人としては此の上に向々益々不幸の襲來し、更らに一層の奮發を致し度い次第である。其の時に至りて初めて、「彼もなか／＼偉い」と思つて頂き度い。今日はなか／＼さういふ時期でない、斯ういふ意味の謝辭を述べたが、之れ實に我輩の哀情を吐露したものである。假令身は富貴にあればとて、假令世の中に名を知られたればとて、決してそれが爲めに意驕つて良い氣になるやうなことは斷じて差控ふべきこと、信じ、且つ行うて居る。されば今以て單純の書生であり、今以て青年時代の奮闘努力の心掛けを保持し、以て益々向上修養の實を擧げ度いと考へて居

る。

不平を抑へ、不満を忍び、刻苦忍耐、堪え難き苦痛を忍びて之れに打ち克つは猛將である。不義を爲さず、不正を行はず、放僻邪肆に涉らず、只だ勤勉し、只だ努力し、勞苦を勞苦と思はず、朝な夕なに活動する人、之れ亦己に克つ猛士である。有ゆる誘惑が目前に襲ひ來るも、敢然として之を排除し、寸毫だも之れを近づけぬ青年は、必ず立身出世すべき資格を備ふるものにして、之れ亦己に打ち克つ若武者である。此の心得だにある人ならば、文武百官、農工商、その他職業の如何を問はず、何の範圍に於ても其の身を抽んで、遂に多數に打ち勝つの光榮ある生活を送ることが出来る。

斯る人の性情を更らに分析すると餘程面白いことがある。政治家となりて一國を支配するは愉快であらう。又大事業家となつて巨萬の富を集ひるも愉快であらう。

又多數を自己に服従せしめることも愉快であらう。之等は總べて人の愉快とする所たるに相違なきも、併し之れだけの事が出来る人は、斯くの如く表面に現はれた事のみを以て愉快とは爲さないのである。其人の心情、心の奥底に潜める一種の靈光は、中々そんな表面に現はれた如き淺薄なものではない。モツと高尚なものである。崇高なものである。何となれば斯の如き結果を齎らすは、之れ皆己の慾望を排除し、只々他の爲めに盡し、只々他の爲めに働かんとする念慮が自然々々に、其の人を偉大ならしめ、遂に表面にも現はれ、人にも美まるゝやうな光榮ある域に到達するのである。決して其の外觀の如何に依りてのみ偉大なるか、凡俗なるかの區別を知り得られるものではない。尊崇すべき人格とは即ち其の人の心の奥底に潜める所の靈妙なる或るものが光り輝きつゝありや否やの一點で決するのである。此處に其の尊さが潜んで居る。即ち偉大なる人は必ず國家の爲め人の爲めに、遂には世界人類

の爲めに貢献しつゝある故に尊いのである。

好戦者は文化の恩人

我輩は平生斯ういふことを確信して居る。世上に行はるゝ言葉の中には、其の眞義を解せずして單に形式の上よりのみ見て、直に一種の惡感を懷くことがあると。審に其の眞義を解すれば、穩健にして理の當然なるに拘らず、只だ形式上より嫌惡するのである。之れは所謂皮相の見なるものにして、眞意を誤るの結果怖るべきものがある。例へば稍々極端なる例ではあるが、好戰的國民といふ言葉は其の一つである。此の言葉は世人より蛇蝎の如く嫌惡の情を以て迎へられて居る。好戰といふ外形よりすれば、或はさういふ感なきにしもあらざるも、併し之れを宇宙の大勢、人事の上より達觀すれば果してそれが適切であらうか。由來文化文明といひ、或は

國民の興隆發展といふ、抑々如何なる種族の手に依りて、斯る大事業が經營せられたかといふに、不思議にも蛇蝎の如く嫌はるゝ好戦國民の力に待たざるはないのである。歴史を緋けば文化文明に寄與し貢献し來つた者は、一つとして好戦的國民にあらざるはないのである。更らに最少し大きく觀ると又不思議なる現象を認める。赤道を中心として世界を南北に分ち、其の國民の發展の様を見るに、北方に住するものは常に文化文明に寄與し、所謂北方の強なるものが、常に民族興隆の動機となつて居るのである。東西に依りて其の程度に差はあるが、文化の進歩は東西に依りては區別せられず、南北の關係に依りて著しく分れて居る。之れは地理的冷熱の作用であるとか、其の他に種々の原因もあらうが、兎も角好戦性を有する北半球の人々が熱血で活動的で剛毅で堅實なることは事實の示す所である。之れに反し概して戦を厭ひ、常に平穩無事を愛好する南半球の人々は、依然として文化の程度が低い。

然らば好戦といふことは、天地自然の關係に於いて如何に見るべきものであるか、宜しく一步を進めて人間より超越したる見地に立ちて一考せねばならぬ。蓋し萬有の生物界にはストラッグル即ち生存競争の存在することは、何人も否認することは出来ない。實に此の世の中は悲觀せるものより見れば修羅の巷の如く、又は三界の火宅の如きものである。厭世的悲觀者等が如何に嘆息すればとて、之れが事實であれば致し方はないのである。生物界の何處にても常に生存競争しつゝあるのである。萬有なるものは古來一毫たも増減するものではなく、只だ變化變遷するのみである。此の點に於いて如何なるものが自然の恩寵を受くるものであるか。蓋し自然は極めて自由に公平にして少しの偏頗だもない。努力して自己を保存し、繁殖し、發達するものを愛すべき寵兒として保護をするものなれども、之れに反し優柔懦弱、自ら努力するの力を缺き、僅に他人の間に介して己を保護せんとすること、麻に交

れる蓬の如きものは、人間としては温良にして可愛らしきものとして可愛せられるかは知らぬが、之れを自然の眼より見れば「此の意氣地なし奴」寄生虫奴」と見做し、可愛とは思はぬのである。故に自然が見て好愛する人は、人が見ては甚だいたづらな穩かならぬものと考へるであらうが、併し此の腕白者、悪戯者が次第に其の爪牙を發達せしめ、手で働いたものが機械器具を使用するに至り、總てのものに優り、總べてのものを征服し、以て今日の文明に進んだのである。

更らに轉じて戦争なるものを見るに、人生之れより苦痛なるものはない、又慘事斯くの如きものもない。併し戦争そのものを分解して考ふれば果して如何。抑々戦争なるものは人間の有ゆる精力を最上に發揮したる形をいふものである。最善の努力の發揮、所謂國民の一生懸命の仕事なるものは之れである。武器も精銳、彈丸も豊富、糧食も充實、兵を遣るには巧妙なる戰略戰術を以てし、而して之れに當

るの將卒は強健に加ふるに訓練を以て鍊磨して居る。戦争は實に人間の有ゆる精力工夫の結晶したるものが、最善の形式に依りて發揮せられるのである。これは吾人が眼前の事實に徴しても知るとが出来る。併し戦争に關したる總べての原理は、獨り國際間の流血の慘事のみならず、人生の戦にも亦適切に應用せられるのである。即ち健全なる細胞集まりて強壯なる人を成すが如く、健全なる社會生活は健全なる個人の集合を待ち、戦争に機械の精銳を要する如く、實業上に於いては精良なる商品に要し、軍資の充實を要すると均しく、資本の豊富を要し、軍需品の輸送に必要なる交通機關は直ちに商業上の交通に應用せられ蕭河の任は即ち會計の整理を要とするが如く、戦争に發揮せられたる全努力は同時に又平和の場合に於いて、富の増殖、貿易の發展を促すものである。好戦の文字は甚しく嫌はれて居るが、我輩はその内容を分解すれば、同時に又富國の要道となると信するのである。王道即霸道、

王道の一面には霸道の要を備へて居る。霸道充實すれば王道となる。我輩は富國を望むこと切にして、而も亦眞の意義に於ける好戦國民たるを辭せぬものである。

堂々不朽の軍國主義

好戦的といふ言葉が皮相に解せらるゝ如く、ミリタリズム即ち軍國主義といふことも亦形式上より惡意に解せられて居る。ミリタリズムといふは、軍事的行動を目的とすること、世人は直ちに侵略的若くは暴戾的に解するものが多いが、其の内容に立ち入りて之を解剖すれば、果して世人の解するが如きものであらうか。軍國主義には第一に秩序を保つことを必要とする。第二には訓練が必要である。其の他大なる忍耐、剛毅、明快、共同的動作、殉職の雄心、士氣の昂奮等の如き、各要素が集りて軍事的行動は始めて起るので、加ふるに名將の兵を用ふる至高至美なる

要素が含まれ、従つて其の間には仁義の行も必要であれば、赤心を人の腹中に置き、人をして身命を捧げて己の命に服せしむるの誠も必要である。此等が相結んで始めて精銳なる軍隊が出来上るのである。

此等の要素は果して不正なるものであるか。我輩は決して斯く信ずることは出来ない。此等は一として社會萬般の活動には缺くことの出来ないものではないか。秩序が保たれずして社會の維持が出来るか。従順、忍耐なくして我々は發展すること出来るか。其の他軍國主義の要素として前に列擧したものは、總て我々や世上に缺くべからざるものゝみである。我輩は毫末も其の不可なる所以を發見しないのである。其の内容に立入れば古今の聖賢が修養々と教養し來つたことは總べて其の中に含まれて居るのである。仁義道德の作用なく、上下親愛の作用なくしてミリタリズムは行はれるものでない。斯く考へ來れば一種の嫌惡を受けて居るミリタリズム

ムなるものも、天理に合し自然に發達すべき理に合せることは斷じて疑を容るべきでない。

但し茲に一言すべきことがある。ミリタリズムの内容は善美ではあるが、世人をして之れを嫌惡させるにも亦一理なきに非ず、之れは歐洲に於いても東洋に於いても、所謂暴君暴將なるものが、此の言葉の真相に徹底せずして過つて武斷的行動を取つたことがあるからである。併し斯る方法に於いて濫用せられたるミリタリズムは決して永續するものでない。前述の如く徹底したる眞の意味に於けるミリタリズムであるならば、是れ自然の愛好するものにして、必ず永續すべきものである、又其の國民は必ず興隆發達すべき筈である。一時は非常に旺盛の勢を示しながら、終には朝に夕を測られぬといふは、畢竟その内容に於いて缺くる所があり、道理に合せぬものがあるのである。斯の如くなれば禍は踵を回らさずして來るであらう。斯

く考へ來れば、人が皮相の見解を以て嫌惡し來れる好戰國民とかミリタリズムとかいふことは、徹底せる主義に於いては自然の命に合致せるものにして、之れを實行する國民は興隆し、發展し行くのである。

我輩は近來閑を得て種々の書を読み、常に斯う思つて居る。近來は歐洲に於いても種々の哲理行はれ、甚だ面白く感じて居るのであるが、併し又東洋に於ける哲學も味ふべきものが甚だ多い。殊に我々が幼少の頃より多年頭腦に染み込める經書中には確かに偉大なる道が通じ、則るべき眞理を包含して居るのである。就中最も面白く感ずるものは周易で、此の周易なるものは屢々俗解せられ、踰躅たる人事の間にのみ行はるゝものと考へて居るものもあるが、中々そんな輕薄なものではない。これこそ眞に宇宙の哲理を説いたもので、獨り蟬蛸の如き人生のみならず、廣大無邊なる宇宙を達觀し、森羅萬象、總べて剛柔相交りて茲に變化を生じつゝある現象

を説明したるものであつて、其の意深遠にして微妙、宇宙間の陰陽の消長、盈虚去來の理を説き、而して其の間の一現象たる人事も亦之れを合せて説けるのである。其の最大の根柢たる乾、即ち陽は至剛を意味し、而も極めて簡潔にして意義の深長なる文字を以て言ひ顯はし、之れを一句に纏めて曰く、天行健故に自強不息と。宇宙間に徹底せる真理は此の一句に包まれて居る。言ひ換ゆれば不斷の努力、即ち徹底せられたる戦闘行為なるものも之れに外ならぬのである。盈虚の由來も、盛衰の由來も、皆之れより來る。殊に面白きは、機を見るそれ神かといひ、又霜を履んで堅氷の到るを知るといふことである。機の伏する所、機の動く所斯の如く微妙である。天行健、自強不息の者は天之れを愛し、又獨り能く此の機に乗ずることが出来る。即ち能く此の意義を解して此の間の消息に通ずれば、前述のミリタリズムと内容に於いて異つた所のない事が分る。學者往々其用ふる言葉によりて、形美なれば

之れを喜び、形惡しければ之れを憎む、何ぞ知らん宇宙天地の大真理は其の間に均しく貫流して居るのである。

歐洲の大戦以來、或る人は恰も思想上に一大變化を來たしたるが如く考ふるものあれど、我輩は決して斯く思はないのである。我輩が數年前より叫び來つたことが今日に至つて實現せられたので、歐洲の大戦によりて幾多の人々が覺醒せられ、幾多の警鐘が亂打せられた。元來戦争の突發するや其の間自ら由つて來るの徑路がある。決して偶然的のものではない。其の由來の原因を検するに、平和といふも、戦争といふも、決して絶對の見地よりすれば何等の差異も認めないのである。即ち平和と稱する裏面には大なる戦闘行為が存在し、猛烈なる戦争の裏面には平和の暖流があることを考へなければならぬ。畢竟するに霜を履めば未だ現れざるに其の下に堅氷あることを考へ、機微の動く所、未だ現れざるに之れを察するのが、即ち達

人の達観する所以である。凡庸の腐儒は霜を見れば霜と思ひ、堅氷の來たるを見て始めて嚴寒の到來を知るが如きものは、到底共に談ずるに足らぬものである。我輩は斷言する、國民は須らく好戰的國民たるべし、軍國的國民たるべしと。只だ世にいふ皮相の見解に於ける意味ではなく、絶對の見地よりして宜しく實體實質を考へ、以て世の曠々者流をして後へに瞠若たらしむるも亦人生の快事ではないか。

人類固有の破壊性

人の痛快とするものは破壊である。人、生れて漸く手足の自由となるや、最初に感興を催すものは破壊である。手當り任せに破壊して、何んともいへぬ一種の興味を感じて居るのである。是れも亦天の賦與したる人間の稟性である。又近時廓清なる言葉が流行するが、其の文字中已に一種の壯快を感じしむるが上に、猶ほ且つ人

の嫉妬心に投ずるのであるから、興味に快感を加へて大いに歓迎せらるゝ所以である。此の故に多くの廓清的運動は必ず社會人心の歓迎を受けて、氣勢は更らに氣勢を増し、炎々たる勢ひ益々其の猛烈を極めるは決して不思議のことではない。是れ蓋し新陳代謝、優勝劣敗、自然淘汰を本義とせる自然の理法、天の妙配劑ともいふべきものであつて、迅雷疾風、鬱結したる暗雲を一掃し、人心にいふべからざる清新の氣風を喚起せしむるのであるから、其の効果の偉大なる、決して尋常の比ではない。

我國近時に於ける大破壊中、蓋し明治時代を産出したる維新前の一破壊に越ゆるものはあるまい。随分思ひ切つた破壊である。實に三百年來の大建築物を破壊したのである。殆んど根柢より舊日本を覆へし、舊習を破り、舊慣を捨て、一面よりいへば實に亂暴狼藉の舉動である。「氣概とはちの字の脱けたお侍」實に氣違ひじみ

た御侍の舉動にはアキレ果てたのである。然し其のアキレ果てたるものこそ、ちには非ずして全く血の氣の脱けたる因循固陋、到底時勢を解せざる者共であつて、此の一大破壊的勢力の前には、最早や手も足も出なかつたのである。凛然たる氣を負ひ、慨然として立てる、眞に氣概ある憂國の志士は、決して破壊を以て満足したのではない。一方に大破壊を試ると共に、他方に於いては早や已に、大なる建設に着手して居つたのである。三百年來の大建築物を破壊すると共に、他面に向つては新日本を建造しつゝあつたのである。此處に勃然として明治時代は興起したのである。

早熟國民懷疑時代

斯くの如く我國の明治時代は、恰度かの獨逸民族の奮闘の如くであつた。假令其

の規模と計畫とは之れに及ばざりしにもせよ、一片の意氣は此の通りであつた。人々國家を以て任じ、何處までも我が日本をして興隆せしめんことを期して居たのである。自惚れなりしかは知らぬが、日東の帝國必ずや他日世界に雄飛し得べき國民的能力を備へて居るものと信じて疑はなかつたのである。堂々たる旭日の國旗は光彩陸離たるものゝ如くに感じて居たのである。此の國民的自負と國民的自信とは、兎にも角にも國家を隆興せしめ來たつたのである。外列強も亦新興の國民として前途に注目を怠らなかつたのである。或る場合には嫉視を招いたこともあつたであらうが、其の精力と努力とに對しては、多少の敬畏を受け、信用をなしつゝあつた事は事實である。

然るに近來は、甚だ面白からぬことを屢々耳にするのである、「一時は天下の耳目を聳動せしめたる日本國民も、唯だ早熟者の一時の發作的現象に過ぎなかつたので

ある。今や興隆の頂上を越して早や已に下り坂に向ひつゝあるのである。日本國民は今や、全く自信力を失ひつゝある。自ら己の能力を疑ひつゝある日本國民は前途に目的を有せず、希望を有せず、人々其の進むべき方向を知らず、懷疑逡巡の國民となりつゝあり。』是等の聲は往々耳朶に觸るのである。屢々外國雜誌に、新聞に散見するのである。苟くも日本國民たるもの、誰か斯様な風評を聞いて、心に面白く感ぜぬものがあらうか。斯様のことを世界に廣告されて、それで我が信用を博することが出来るであらうか。實に遺憾千萬の至りである。乍去密に顧みて我が現狀を察すれば、已に前にも一言したるが如く、明治の偉業を成し遂げて以來は、張り詰め居たる國民の氣力には、確かに緩みを生じたのである。前途に國民的の一大目的となるべきものが無くなつたやうに見ゆるのである。民族的思想を統一し、集中せしむべき大目標が掲げられて居らないのである。此處に於いてか種々の思想は國內

に横流し、各人各個の目的を以て、銘々己が主張を爲すのである。殊に最も甚しきは、所謂政治家として高く自ら標榜する人々までが、此の個人的思想の横流に乗じて、徒らに人氣を博せんとする藝人の如く、阿諛、佞妄、競うて國民の歡心を買はんとする事である。

斯の如き結果は、不知不識の間に、國家を第二として先づ國民個々の休養を唱へ、其の氣力をにぶらしめ、精銳の氣象を銷耗せしめ、終には一家一族をして小成に安ぜしむるのみならず、衰運に導くに至るのである。恰も彼の富豪の若主人をして歡樂の巷に誘惑する幫間、昔時封建の頃君寵を貪る奸臣、媚を獻じて一城を傾くる者、是と何等の差はないのである。願はくば、國家を憂ふる士、我が既往に鑒み、將來を察し、廣く天下の趨勢に顧み、我が國民をして發展向上せしめ、國家的旗幟をして鮮明ならしめ、前途に一大目標を掲げ、明治時代に於けるが如く、大正の新

時代に於いては、更らに其の規模を大ならしめ、統一的歩武を進ましめんが爲めに努力せよ。此の一大動機の存するありてこそ、國民的産業の振興に初めて生命を生き、眞の活動を見るに至るのである。想起すれば、ゼルマン民種が今日の此の隆昌を興起せしめながら、當時世に容れられず、悲惨の最後を遂げたるフリードリッヒ、リストが其の磅礴たる精神、今猶ほ凜として聲あり、熱血を注ぎたる國民的經濟論に於いて、國家經倫の大策を講じたる最後に於いて、千萬の言も要するに國民的精力、努力の一語に外ならずとは、實に書龍の點睛、全篇凜として生動するを覺ゆるのである。

第六節 強者の生活

實力主義の時代潮流

何時の世、如何なる時を問はず、各時代には其れ々の潮流がある。即ち時代思潮なるものが其れである。されば、世上の事物に意を用ゐるものは能く此の大勢の嚮ふ所を察しなければならぬ。

歐洲諸邦に於ては今より百年前、否、五十年前と言つても可い、即ち十九世紀の半頃までは主として總べてが形式に重きを置き、其の結果として國內に於ては法律萬能となり、外交に就ては國際法が金城鐵壁の如く解せられ、何人も之を動かす可からざるもの、如くに確信された時代があつた。然るに十九世紀の半以降は是等形

式の價値が次第に減殺せられ、近く二十世紀の始に入りては形式よりは内容に重きを置く様に成つて來た。固より形式其物を敢て無視する譯ではないが、内容に重きを置くの思潮が横流し來つたのである。即ち之を個人に譬ふれば、一時は法律上、所有權に重きを置かれた時代があつて、土地に對する所有權は絶對的の權利を有して、侵害されざると共に絶對に自由を有するもの、如くに信じられたものである。即ち所有權の上から言ふと、其所有の土地を如何に放棄して荒廢に委するも構はぬものとしたものであるが、如何に自己の所有とは言ひながら一に之を放棄して顧みず、可惜荒廢に歸せしむるは、所謂土崩瓦解せしむるもので、之は實に間違つた考へである。即ち之に隣接せる土地は何うなるかと云ふと、其の影響を受けて亦漸次に崩壊して其の波及する所は測り知る可からざるに至るのである。故にその根柢には、自己の所有地なるが故に、縱令之を開發する事なく徒らに放棄するも善しと

信じて、事實は然うは往かぬ。苟も人間が共存して相互に天地間の幸福を享くる以上は、個人相互の一舉一動は總べてに聯關するものであるから、他に迷惑する影響を及ぼさぬ様に天地自然の理に従はなければならぬ。されば其の所有する土地は之を善良に使用し、有益に使用して、自利的に且つ利他的にしなければ成らぬと云ふ事になつて來た。假令一片の法律即ち形式の上に於て之を許すとすも、内容實質に於ては許さぬと云ふ事が思想の根柢である。従つて是等所有權も絶對の者では無い。

また嘗ては法律萬能を信じ、法律保護の所有權は絶對に安全であると思はれたが此の思想も亦誤まつて居ると云ふ事が解る。即ち法律なるものは蕞爾たる人間相互のものである。其れ以上に超越したる廣大無邊なる大自然の理法がある。此の理法なるものは極めて公平である。殊に此大自然の條理は、萬衆に對して努める者に幸

福を授け、怠る者に不幸を與へる。此は驚くまでに徹底した道理である。

彼の大なる富豪の遺産を相続したる者は、法律上から見ると大資産家で、形式の上にては安全であるが、然かも之れを相続する者にして能く之れを維持するの實力が無ければ、大なる自然は決して之を緩慢に附し去るもので無い。即ち之を維持する能力なき者は、或は誘惑の囚奴となり、或は悪魔の乗ずる所となり、目錄圖面は何の用をも爲さぬ事となる。要するに己れ自ら之れを維持するの實力がなければ法律上の所有權は一向に價値なきものとなる。終局の歸する所は内容の問題で、形式の問題では無い。年々歳々、眼前に展開さるゝ華族、若くは富豪の二代目三代目の失態は、歴々之を證して居るのである。これは獨り個人に止まらず、國家としても同様である。即ち地圖を劃して我が領土と言ひ、圖面を徵して勢力範圍と云ふも其の内容に於て實質を有せず、己れ自から之を保護維持するの力なければ、單に領

土と云ふ色彩を加ふるに過ぎない事となる。

要するに、形式よりは内容を切實とする思想は二十世紀の初頭以來今日に至るまで現實的に表現せられたもので、決して一朝一夕の發現では無い。漸次に人心に浸潤したる思想が今日の現實状態を表はしたのである。即ち此の思想は自己の事は自己で爲し、他力は頼むに足らず、頼む所は徹底せる自恃的精神實力である。實力なき形式や、法律萬能は今や過去の夢となつたのであるから、現世紀に處する者は宜しく此の思潮界を察するの明がなければならぬ。

人生成功の眞意義

近來都鄙を通じて用ひられて居る言葉に成功と云ふ二字がある。此の二字は下劣で高尚でないと言ふのは宜しくない。何んとなれば、人は常に其の事業目的に向つ

て成功を期する考へがなくてはならず、又人生は生存競争と云ふ事を生るゝより身を終るまで演出して居るので、優勝劣敗と云ふ天地間の定則に伴うて其間に存在して居る一生物であるから、所謂優勝者となる事を要する。劣敗者として悲惨なる境遇に陥ることは固より避くべきである。

されど、茲に熟慮深思を要することは、眞の成功者、眞の優勝者たるの眞意義を解すべき事である。彼の皮相劣悪の成功は徹底せる意味の成功では無い。又一時の浮雲的優勝者は眞の優勝者と稱すべきものではない。古來英雄の行動は成敗の跡のみに由りて其の心事を測る可きものにあらずと言はれて居る、又不義にして富み且つ貴きは吾に於て浮雲の如しといふ言もある。されば如何に成功して一時は優勝者たりしとしても、其行が一般人生に反對して何等の意義を與へずまた何等の靈光を示さざるものは、之を成功者として寸毫も欽仰すべき譯のもので無い。要するに斯か

る成功者は何等の尊むべき價値がないのである。されば皮相なる成功、無意義なる成功は凡夫といへども之を成し遂ぐる事が出来る。例へば人の窮迫に乗じて高利を貪り之によりて巨萬の富を重ね、或は阿諛便佞、幫間の如く只人の意志に迎合し、聊かも刻苦努力する所なくして尊榮の地位に達するもの無きに非ず。或者は此輩を指して成功者と稱せんも、斯かる成功は果して一般青年の模範となるべきか、或は人の龜鑑として尊まれ得るかと云ふに、斯かる輩は其間に秋毫の尊むべきを見ざるのみならず、却つて世に害毒を流し、人心を益々低下せしめ、遂に人を墮落の深淵に導くもので寧ろ害あつて人の指彈を免れざる事となるのである。

要するに成功の尊むべきは、其の成功せるものが、其の内的生活に於て正義の觀念を有し、外的行動に於て努力奮勵をなし、其の結果一般人心に一種の靈光を發揮し、人をして奮起せしめ、其れによりて人類の墮落を防ぎ、遊惰を戒め、自から人

を向上せしめ、延いて一般の進歩發達の基とならしむる所に欽仰すべき事を見出すのである。斯かる人物を指して所謂凡俗を超絶したる優勝者と稱すべきである。即ち其人の一言一行は、善く世の模範となり龜鑑となり、其機に觸れたるものは肅然として自から襟を正すこととなる。例へば古來大宗敎家、大哲學者、大英雄、大政治家、大事業家となり、長く青史に其名を留むる人の行爲を見ると、其の通有性として一種天地間の磅礴したる正氣を有し且つ靈光を有つて居るから、其人は縱令歿しても其の正氣は長へに天地間に磅礴し人心を振起せしむるのである。之れ實に不死の人と言ふべきもので、成功も茲に至りては大成功大優勝者で、實に至大なる意義ありて大に欽仰すべきものである。

然るに今日の如く徒らに皮相のみに馳せ、凡俗は唾棄すべき成功を以て眞の成功と思ひ、理非の如何に關はらず、亂暴狼藉の舉動により、縱令僥倖にして一時

は優勝の地に立つとも、此輩の成功なるものは畢竟浮べる雲の如く、又砂上の樓閣の如きもので幾何ならずして顛覆し、其の結果は從前に優る悲酸なる境遇に沈淪するものである。要するに、天地間の一大鐵則は儼乎として存在し、如何なるものも此の理法には支配に漏れないのである。されば世の青少年は能く成功の眞意義を解釋玩味し、各々能く其分を盡し一步々々健全に向上進歩の法を講じ、近時の滔々たる弊風に汚濁されてはならぬ。即ち泥中の蓮の如き高き氣品を混濁せる流俗の間に現はし、其の人物氣品能く備り、引いては衆人を欽仰せしむる一大思想が胸中に湧いて居らなければならぬ。

一路春風長安に到る

我輩が常に青年諸子と共に深く心に銘じ、絶えず其實踐を期せんとする一事は、

「自己の運命は須らく自ら之を開拓せざる可からず、志は雄大なる可く而して之を貫くは堅忍不拔に在り」との數語是である。抑も青年たる者は常に前途に光明を認むるの意氣がなければならぬ。前途に光明希望を認め得ざる青年程世に不幸なる者は有るまい。到底斯かる人々は將來に進歩發展を期することは出来ぬ。然らば前途に光明を認むるの工夫は如何と云ふに、先づ以て能く自己を解し、自己の天分を知り、自己を信ずるの力を養成するに在るので、己れ自ら信ぜずして人誰か之を信じやうぞ。古往今來人生の首途に先づ必要なるは立志であつて、志の有る處必ず茲に道がある。千里の道を行かむとするもの何人と雖も其初は一步よりす、門を出で、一步の際は何人も異なる處はないが、或は十里にして仆る者、或は百里にして仆る者、遂に進んで千里の道に達する者、是れ皆其志の如何に依るのである。

一路春風到長安、是れ詩人半面の觀察であるが、人生の行路は決して如斯坦々砥

の如きものではない。嵯峨たる險峻、羊腸たる九折、時に或は茫々漠々たる津涯に彷徨ひ、或は星暗うして時に葛藟途を没す、困頓轉踏蹉躓すること其幾回なるを知ることが出来ない。されど行くに途なくんば、猛然として進んで之を開拓するの勇氣が無ければならぬ。進むに利あらずと見れば迂餘曲折、時に或は草野に伏して靜に機を待つ、の智慮も無ければならぬ。一起一仆、緩急各其宜に適するものでなければ到底千里の行を全うするとは出来ない。不屈不撓、堅鐵の意志を有する者でなければ焉んぞ能く其困難に堪へ得んや。果して然らば人間生れて男兒たり、胸中一面に於ては豪毅峻烈、猛然として百難を排し、千挫屈せず、驀然として精進するの勇猛心を藏すると共に、他面に於ては磊々落落として春風城裡靜に落花を見るの襟懷無ければ到底能く長途の行に堪へ得ないのである。思うて茲に至れば一路春風到長安是亦人生行路一面の消息を解し得たものと云ふべきであらう。

一難加はり勇氣百倍

人生を以て苦難堪へ難きものとするが如きは、竟畢己が意志の薄弱を示すに外ならず。強弱は元來物の比較のみ、苦痛と云ひ快樂と云ふは、詮じ詰むれば、是亦己が心中に自ら書ける幻象に外ならぬ。前途の光明は敢て之を他に求む可きものに非ずして、畢竟我が心の裡に存する困難なりと思へばこそ苦痛の感も出て来るなれ、我輩は常に思ふ、人生眞の快樂は快裡の快に非ずして寧ろ難中の快味に在り、一事を成し遂げたる上に於て成功の愉快を感じるは、其徑路の困難なりしを追懷するに依りて津々として言ふ可からざる快味の湧き来るを覺ゆと。經過したる困難益々大なれば成功の快味は愈々大きく、平板水を流すが如き成功は其間何等の感興なく、何の味ふ可き快があらうぞ。既に難中の快味を知る、百難襲ひ来る毎に一脈の快味

は湧然として伴ひ來るのである。

一難毎に勇氣百倍す。是れ決して無稽の言ではない。人を玉成するものは眞に艱難の賜である。大成せしめむとすれば天は先づ之を難の淵に投ずとは洵に千古に通じて溢らざる處、果して然らば困難は決して逃避す可きものでなく、寧ろ進んで之に當るに誠に人生の快事である。天は前途に光明を認めしむが爲に、故らに一時之を暗中に置くものと思へば、何を憂へ何を悲まむ。前途に洋々たる春光を迎へながら仲々として獨り身の不幸を歎ずるものあらば、其の狂態何ものか之に比するものあらうぞ。

我輩は彼の薄志弱行にして徒らに婦女子の態に倣ひ言行常に軟弱にして世上の事物悉く之を悲觀し、獨り自ら己を悲むの徒が少くないが、世上不幸の人多しと雖も蓋し之に若くものはないと思ふ。我が國幾多の青年、斷じて斯る徒輩の羣に倣ふ事

なく、男子は須らく男子らしき本領を發揮し其地位の如何や其職務の如何に拘はらず、其志望は常に雄大に其心術は常に高明に、博く衆を愛する心を以て人に接し、職務を執るに際しては、全力を擧げて之に膺り、餘暇あらば汲々學んで以て己が智識を練磨し、身心の鍛練修養漸次其効を積むに至れば、天空海澗、胸中何の凝滯するものあらむや。其職務に忠實なること如斯、其行を修むる事如斯、其智識技倆を琢くに怠らざる事如斯、此數頂に於て斷じて人後に立たざる事を自覺するに至らば、世上何の恐るゝ處かあらむ。何をか憂へ悲まむ。何の違あつて婦女子の態に倣はむ。猛然たる勇氣は自然に胸中に來往し、雖千萬人吾往矣の眞諦に達すること斷じて疑を容れぬ。

既に胸底に於て此眞勇を藏すれば精神自然に活潑に身體自ら強健に、己を信ずる事篤ければ敢て他を嫉むの念を生ずる事なく、自己を恃むの心強ければ敢て他人を妬むの感を生ずる事なく、自己を楽しみ自然を楽しみ、觀るもの聞くもの一として樂しからざるは無い。偶々困難に遭ふ事あるも却つて困中の快を貪り、難裡の妙味を捉へんとする。如斯にして進歩發達せざるものは未だ嘗て無く、人間此に至りて何の幸福か之に若くものがあらう。發奮自勵何事か就らざるものあらうぞ。

風雲に乗ずるの要件

人の生涯には主觀客觀とでもいふか、自己の作用に基くこと、自己の作用に基かないで、偶然に生ずる事柄とがある。世人は之れを指して運不運というてゐる。運不運といふことは人生に伴うて必らずある、ないとは言はれぬ。併し人生最多の事柄は必らず人の作用に基くものである、偶然の事なりといふも、深く其由來を研究すれば、偶然ならぬことが多い。

機會、これは實に妙味のある言葉である。例へば不毛の原野に入つて之を開拓するとか、或は遠く離れた地方に前人未發の事業を起すとか、人の未だ見出さざる所に目をつけ、之を見出すとかいふ關係、是等も亦所謂機會を捉ふるのである。機會は天然にある。それを人の智慮、考慮、努力によりて自己の有とするのである。偶然の如くして決して偶然でない。丁度春暖の候に種子を播き、梅雨の時を見て挿秧するが如く、天然自然に到來する或る時機を正當な方法で人事の用に供するのである。適當な時機に於て之を利用するは人の働にして、手を拱して取らぬものは永久に機會を捉ふるとを得ぬ。言ひ換へれば幸運の機會は如何なる人にも來るのであるが、只之を捉ふると否とによりて幸不幸の差を生ずるのである。

古來大事業を爲した人の事蹟を見るに、如何なる場合にも到來した機會を外づしたことがない。寧ろ一步を進めると自ら機會を作り成したのもある。更にその機

會を擴大したのもある。遂には一大風潮を作り成すに至つたものもある、更に進んでは永く將來に迄感化を及ぼす様な大事蹟を残したるものもある。或は又時としては全く自己に關係せぬことによりて、即ち偶然に機會の到來した様なともある。それは自己の上より見れば全く意外の事と想はれる。例へば太閤秀吉の大事蹟を視るに彼の事業の出來たのは天正九年の只一ヶ年間にありと云うて差支ないと思ふ。

疾風の活躍千古の快事

其の事蹟を概括するに、天正九年の初より彼は中國征討に向ひ、専心一意、この事業に非常に努力したのである。然るに六月に至り京都本能寺に突發した出來事は彼の身に取りては實に意外のことであつた。然るに秀吉はこの報に接するや直ちに善後策の方法を盡くし、絶大の膽力と機智とを揮うて、當時に於ける事情の大變化

を明らさまに打明け、毛利家と和を講じ、直ちに其兵を率ゐて山崎の一戦に醜類をして遺棄なからしめた。是より以後、彼の威望は隆々として中外を歴し、大事は殆んど彼の手に歸したのである。この事たる秀吉に取りては全く意外のことであり、又意外の事であつたればこそ人心も彼に歸向したのであつた。併し彼が此に至つた原因を講究すると、山崎の一戦により直ちに威望中外に振うたのでなく、その準備は既に其前より充分に出来てゐたのである。知ると知らざるとの差はあつたが、斯の如き形勢に至るべき準備は既に彼の手にあつたのである。彼が積年畜積し來りたる手腕と技倆とは、當時中外の者をして充分之を認めしめたのである。毛利氏が彼と和したるも畢竟は其技倆に推服したからである。

殊に柴田勝家に對する賤ヶ岳の戦争の如きは、最も明瞭に秀吉の機會に乗せるを示せる事蹟である。我輩先年歐洲に赴く際、途に尾張中村に秀吉の出生地を尋ね、

敦賀に至る途中に、米原の驛で豫て相知れる伏見の師團長と同車し、恰も賤ヶ岳の山麓を通つた時、師團長は最も興味ある當時の戦争談をした。此間機動演習を行ひ山麓より賤ヶ岳を越えて更に柳ヶ瀬まで追撃せしめたが、中々容易ならぬことであつた。然るに世に稱する賤ヶ岳の七本槍と稱する事蹟を考ふるとなかく面白。柳ヶ瀬に陣した佐久間盛政は曉に乘じ岳麓に中川清秀を破り、留つて歸らなかつた。流石に老巧なる柴田勝家は是非に歸れと五回までも命令したが、猪勇の盛政は其命を奉じなかつた。岐阜に向はんとした秀吉は此報を耳にするや機に乗ずるは此一舉にありと思ひ、直に其手兵を提げて追撃し、更に進んで敵の本壘を衝の計を立てた。その時の里程、進軍の有様、實に間髪を容れなかつた。然るに秀吉は其手兵を提げ直に岳麓に迫り、一舉して盛政の軍を破り、北ぐるを追うて長驅して北陸に迫り、遂に北庄福井に於て流石梟雄の柴田をして灰燼に歸せしめたと、師團長は地勢を案

進軍の有様、接戦の状況より、更に進んで追撃の有様まで手に取るが如く評説した。場所も場所だし、又歐洲出發の途上でもあつたし、我輩は非常に愉快を以て之を聞いた。而して當時心中にかう思つた。秀吉があれだけの大事業を成したのは決して偶然でない。彼は有らゆる場合に機会を捉ふるに實に明敏であつた。一とたび機会が到來したと見れば其全力を擧げ寸分の油断もなく寸分の遲滞もなく、斷々乎として當つたのである。従つて其向ふ所敵なく、戦うて勝たざるなく、所謂斷じて行へば鬼神も之を避くといふは秀吉に於て能く示されてゐる。此處が人世最も味ふべき所である。天機と稱するは此にあるのである。只實に遺憾とすべきは多くの人々は機会が眼前に到來するに拘らず、過ぎ去つた後になつて、あゝもすれば宜かつたと思ふ時には機会は背部に毛髪がないので捉へることが出來ぬ。併し捉ふるには捉ふるだけの準備が必要である。それだけの修養あり、力ある者でなければ出來ぬ。力

とか手腕とか云ふことは平生の修養鍛錬によりて養はれるもので、決して偶然に其日に出来るものではない。全く平生にあり、平生に準備し、平生に修養し、而して必要に應じてそれが發揮されるのである。

艱難に生き逸樂に死す

今回の歐洲大戦局に關する各種の著述は、汗牛充棟も嘗ならぬ有様で、殆んど際限がない。従つて其に對する論理的思索の權威は、玉石同架の状態に置かれてある。去りながら極めて抽象的に綜合的に、一握みに掴んで考ふるに、其根元は簡短明瞭である。即ち大禍亂、大戦亂を惹起して居る其源は只一人の行爲から出て來たものであるといふべしである。其一人の行爲から生じた變化は更に變化を生んで、千變萬化し以て世界を擧げて幾千萬の生靈に影響を與へて居るのである。歴史は繰り返

へすといふが、今回の大戦亂を觀察して實に争はれぬことを切に感じた。それは何ぞや。今より百年前歐洲大陸を大暴荒にあらし廻つた一人の腕白者、コルシカの英雄大奈翁！此のコルシカの一小島に産出したる腕白者が、呱呱の聲を揚げて大地を踏んだが爲めに、遂に歐羅巴大陸を擧げて大騒動を始むるに至つたのであるが、之を思へば眞に茫然自失せざるを得ない。勿論最後の一戦には餘り強くはなかつたやうであり、ウエリントンをして聯合軍の月桂冠を戴かしめたのは抑も時の力であつたと見るべきものあるとはいへ、僅か一人の力を挫くために、聯合軍總が、りの力を絞らなければならなかつたとは、此腕白者の力量も如何に偉大であつたか。

斯て聯合軍總が、りの力を以て、ヤット一人のカルシカの英雄を取押へ、總が、りの力を以て、此虎を折の中に入れて遙にセントレヘナの孤島に封し込めた時は、英吉利其他の國々はホット呼吸を吐いて之からはヤレヤレ樂が出来るといふて大安

心したのである。而して當時各國民の胸中には期せずして斯ういふ考へが湧いて來たのである。是からは人生の快樂を放縱にする事が出来る、何でも短い生命である快樂に憬憧るゝがよろしい、虎を取押へた其骨休みだ、思ふ存分快樂を貪らうではないか。斯ういふ有様で、後は他愛もなく蕩けるが如き飽漫の間に、醉生夢死の日を續けたのである。併し乍ら人生の快樂を放縱にするには天地は平和でなくてはならぬ。平和は文明の賜である。平和文明誠に都合よき名の下に、實は耽溺境裡に百年の夢を過したのである。

然るに百年後の今日は奈何。戰場にも婦人がなくてはならぬ、金錢の力さへあれば、奈何なる事もなし得べきものだと考へたのである。塹壕土穴の間にあつても、酒の香は忘れ難い。殆んど骨も肉も軟化し、耽溺化し、恬然として碎け了るが如き有様となつたのである。然るに之に反して同じくコルシカの英雄に蹂躪せられ、慘

虐極まる憂身に遭うた北陲の蠻民はエナの一戦に非常なる奮發心を起し、飽迄も此困苦に打勝たねばならぬ、此屈辱の中より崛起せなければならぬ、此憂身を見るに付けても頼むべきは力である、飽迄も力によらなければ人は虎の餌食になるのである。斯て一片敵愾の心は此百年間に所謂セルマン魂を作りなしたつたのである。而して此屈辱と困難とは益々其筋骨をして鐵の如くに化せしめ、「科學的蠻勇」と稱せんか、何と云はふか、名前は勝手に云へ、自己は只己の力によつてなすべき事をなすのである、世界を併呑するから然らずんば滅亡か、一かバチか、随分思切つたる事を公言し、輪格も鮮明にして、何處迄も徹底的に幕進して來たのである。

荒法師か厭世家か

固は一個のナポレオン、其ナポレオンの蹂躪したる鐵蹄より、二つの花が咲いて、

其後百年間に一は極めて柔軟に陥り、一は極めて剛強となつた。斯の如くして百年後の今日其の二つのものゝ衝突を見たのであるが、其の勝敗の數は自ら知れて居るではないか。人は勇敢に生きて安樂に死する、天行は健也。自彊息まざるものは榮ゆ。霜を踏んで堅氷の至るを知るものは亡びず。斯なるには斯なる、何れも理由があるのである。人事を超越したる自然の眼より見れば、何れも豫定の通り、規則通りの結果を現はして居るのである。

國家の運命も個人の運命も、興亡成敗揆を一つにせる事は實に不可思議といふ外はない。近來の學生中、哲學哲理を攻究するがために頻々として自殺者を輩出するが、是れ實に奇怪なる現象にして、抑々哲理を研究する者果して厭世となるか、果して自殺すべき境涯に身を投すべきものか。悉達太子も今日の状態よりすれば、厭世悲觀の貴公子である。或は雪山の出奔も華嚴瀧の道行きか、高尾山落であつたか

も知れぬ。然るにヒマラヤ山でどういふ者に出遭つたか、どんな事によつて心掛が一轉したのか。一轉すると共に難行苦行に堪へ忍び、嘗て厭世悲觀に煩悶したる一貴公子は、遂に千萬年に涉つて衆生を濟度すべき一大英雄となつて居る。北面の武士遠藤盛遠が渡邊渡の夫人に懸想して、誤つて袈裟御前の首をはねたときには、其思ひ詰めた度合の深かつた丈に、一時は遺瀨なき悲觀に沈んだのであつた。さり乍ら生來の強身は此刹那の間に於ても、直ちに其氣風を顯はして、古今稀なる荒法師となり遂に天下をも一呑せんとの大勇猛心を起したのである。哲學を攻究し哲理を思索せばとて、同じく讀んだ書物であるが、自己に本來の強味を有するものは、之を硬化して益々勇猛心を發揮するのである。日蓮然り、法然、親鸞然り、多くの高僧然りである。然るに生來の弱味を有する者は、讀んだ書物は益々悲觀する種となり、さも弱味に同情してくれるが如き考を以て、遂には世を果敢なむの揚句、青年

の身を以て死地に就くの愚をなすに到るのである。所詮は生來の弱味が世の苦痛に對抗するの意氣なくして、あはれ果敢なくも厭世悲觀となつて、實に男子として恥づべき行動を取るものである。畢竟は見下げはてたる弱蟲共、時代を解せず、國家を解せず、更に進んで人生を解せず、宇宙萬有を解せず、萬有の生々發育の道理すらも解しえない者共である。見る者は一つ、心々に之を迎ふるのである。「人生は全く心の思なしである」と云つた古言は實に千古の格言である。高杉東行の歌に「面白き事もなき世を面白くすみなすものは心なけり」とある。男子として生れたからには胸中一點此意氣はなくてはならぬのである。何をくよくよ世迷言をいふか、吾輩は實に軟柔動物を見る事蛇蝎を見るよりも憎むのである。

大人格鍛錬の要點

日は常に晴天で無い如く人生もまた常に得意の時のみではない。故に吾人は平生得意の時代にあつても失意の時代を忘れてはならぬと同じく、逆境にあつても順境の来るべきを信じて失望してはならぬ。然るに世人の多くは得意の時代にあるや、世相の變化の如くまた自己の境遇を顧みず、世の中は常に太平無事の如く考へて居る。故に心驕り身緩んで、また變に處する道、危に對するの法を考へて置かぬ。故に一度逆境に遭ふや、頓に意氣阻喪して之を突破奮起するの勇なく、空しく人生不如意を嘆ずるといふ有様である。之れ豫め逆境の到來を豫期せざるためであつて、平素の覺悟が足りぬ結果である。「憂きことのなほ此上に積れかし、限りある身の此身験めさん」。逆境中に於て第一に心得べき事は、逆境は自然が自分を験するのだと感ずる事である。天の將に大任を我に下さんとするや、先づ其力を験するは古人の格言であるが、眞に其通りで古來偉大なる人物にして異常なる大困難に遭遇せぬ

ものはない。彼等は一難來る毎に之れは天が我を試験するものである、我をして功を顯はさしめんがために我力を験するものであると覺悟し、敢然として屈せず、益々勇氣を揮ひ起して邁進するために、艱難汝を玉にすで、益々膽力を洗練され、終に偉大なる大人格を造り上げるに至るのである。

禪宗の心魂鍛練の奥義も之と異ならず、或は裸體で雪中に入るとか、或は酷暑に熱火を前にして座禪を組むとか、種々な困難缺乏に遭遇して克く之に耐へ、以て其膽力を練磨し、進んで苦中の樂、難中の快を發見するに至るのである。凡て如是であれば、吾人にして大困苦、大障害に遭遇して之に挫折せず、一度之を突破排除することが出来たならば、最早逆境を離脱したもので、成功の神に救はれたものである。何んとなれば、一度大困難に遭遇して能く之に打勝つときは、茲に一種偉大な力を得る。故にこれ以後湧起する小困苦、小迫害の如きは曩の大困苦に比較して

何の難作もなく、自若として微笑の下に突破することが出来るからである。吾人一度此境地に到つたならば、已に順境も逆境もない、順逆の境遇の上に超越したもので、當に達人の域に達したものである。而も此境遇に到ることは何人でも出来る。唯困苦に屈せず、迫害に驚かず、一向専心に自己の目的を變へず努力精進する事に依つて何人にも出来る。人は憂患に生き安樂に死すとは此の謂に外ならざれば、憂患來らば之れ我れの生く所以である、我れの成功する門口であると喜んで此の憂患と争ふの覺悟を持たなければならぬ。而して安樂は我身を殺すの基であると常に戒心して益々修養努力を怠らざること、是れ大人格を築き上げる要點である。

第七節 養力法

正當なる理解と信念

如何なる困難にも挫けず、如何なる敵にも屈せざる、最も強大なる力を得る第一の要件は正當なる理解と確乎たる信念との上に立つて、最も公明正大に堂々と身を處することである。我輩は此の適例の一つとして茲にビュローロ公の事を簡単に述べて見たい。由來政治家の述懐には往々にして、其の國民性に對する深刻な批評の含まれて居る場合が多い。我輩は近く獨逸の前宰相ビュローロ公が在職中の感想を述べた記事を読んで、深く其の眞摯の氣に動かされた。ビュローロは語つて居る。「政治といふものは由來困難な仕事である。殊に獨逸人は恐ろしい理屈っぽい國民

で、何事にでも一理屈なしには納まらぬ癖がある。さうして動ともすると、直ぐ宇宙の道理にあるとか、ないとかいふやうな事を捏ね返す。些細などに直ぐ宇宙が出るのであるから恐入る。自分の友人で久しく英吉利の國政を執つて居た人が、獨逸に滞在して斯ういふことを話した。「獨逸人は驚いた理屈が多い。英吉利人も可なり理屈屋ではあるが、獨逸人に較べると實にアツサリしたものである。一通りの理屈はいふが、大抵の所でマア〜と妥協して仕舞ふ。其處へ行くと、獨逸人は其の道理が飽までも徹底しなければウンといはぬ」といつて居るが實に其の通りである。」

ビュローは更らに轉じて次の如く語つて居る。「然しながら、獨逸人の頼母しい所もそこにある。政治家として此の理屈っぽい國民を支配するといふことは却々容易の業でないが、一度びそれが理解せられたとなると、今度は國民の方から進んで政府の施設に足を運んで呉れる。世界の大勢は今日斯くの如き状態にある。之れに

對する獨逸の立場は斯くの如き所にある。故に此の際は國民が餘程奮發して呉れなくては困るといふ理由を十分に説明して、それが國民の附に落ちたとなると、最う此方のものである。國防の問題でも、財政の問題でも、殖産興業の問題でも、ドシ〜片が付いて行く。ゼルマン帝國が短時日の間に長足の進歩をして、今日の世界に雄飛することを得るに至つたのは、全くこの國民性の賜である。學術技藝の發達發明製作の盛大、化學工業の進歩、皆獨逸國民の理窟癖が齎した偉大な結果である。飽くまでも研究的で、一度び手に觸れた仕事は徹底させずには置かぬといふ所謂獨逸魂が、或は化學工業の上に、或は哲學宗教の上に或は醫學に、多くの獨創を産んだのである。思へば自分が政治家として手を焼いた點は、寧ろ大いに獨逸國民の特長として世界に誇るべき所であつた。」

一寸考へると、餘りやかましい理窟をいふ國民は如何にも實際には疎いやうであ

るけれども、實は決してさうでない。自分の腑に落ちぬこと、氣の済まぬことを好い加減にして置くのは、其の人の正直でない證據である。飽くまでも道理を究めた後、是を是として非を非とするのは、哲學者の所謂天地の眞に接する所以である。かマア〜で事を好い加減に済まして行くのは、やがて恐ろしい虚偽に陥る所以である。ビエローの述懐には、獨逸人が恐ろしい理窟つばい國民であるといふ事、それが獨逸國民の精華であるといふことがあつたけれども、其の述懐の半面には又斯ういふことが含まれて居る。其の理窟つばい獨逸人を相手に政治をやつて來た自分は、苟くも道理のないことはしなかつた、自分に確信のないことを好い加減にはやつて來なかつた、如何に理窟を捏ねられても十分に説明をして、彼等を納得させずには措かなかつたといふ強いく誇りが、此の述懐の中に含まれて居る。

心の奥底に確乎たる信念と理解とを持たず、事を好い加減に押し付けて行くもの

と、飽くまでも研究して合點の行つた所でなければ物事を決せぬ者とは、或る一大事に際會して始めて其の價値が分る。國家の一大事に際して所謂愛國心の發動となり會社の一大事に際して、重役以下従業員一同の奮闘努力となり、家内の一大事に際して孝子貞婦の出現となるものは、必ず平生に於いて、物事に充分の理解と信念とを持つたのでなければならぬ。之れを例ふれば一國の軍隊にしても其の通りである之れを指揮する將校はもとよりであるが、兵卒各個に至るまで、我が國の世界に於ける地位、我が軍の目的我が部隊の行動、兵卒各個の負へる任務を最も明瞭に最も確實に理解するのが世界に於いて最も強い軍隊である。兵卒は只だ大將の指揮に依つて機械の如く働かすればよいといふのは、最も舊式の軍隊である。

今後の世界に於ける國家の競争は、只だ此の一點に依つて勝敗が決するのである即ち國民をして心から國家の爲めに働かせるか、仕方なしに厭々ながら働かせるか

問題である。我が國は世界の大戦に参加して、今こそ小康を得て居るもの、將來は如何なる難局に立たねばならんかも知れぬ。我國政を如何に料理し、我國民を如何に指導して行くかは、政治家、經世家を以て任ずるもの、頭上に投げられた問題である。此の問題が解決せられて、國民はその國家は自分達の國家である。政治は自分達の政治であるといふ自覺を得た時こそ、我輩の所謂確信あり、道理ある男性的政治の行はるゝ時である。斯くして初めて確信あり理解ある男性的國民を造り成すことが出來て、國運の隆々發展を期すべきである。

讀書の修養と讀書法

精神の剛健を期するには、第一に心事の公明正大なることを要するは前述の如くであるが、心事の公明正大を期するには有益なる讀書に俟つもの最も大なるを思は

なければならぬ。有益なる讀書に依つて、健全なる思想を養ひ、明確なる知見を磨き、不屈不撓の意志力を鍛ひ、更らに古英雄、古賢哲が如何に艱難誘惑と惡戰苦闘して以て身を處せしかの點を研究して鼓舞策厲する等、讀書と剛健の精神とは最も密接の關係がある。故に茲に讀書の心得に就いて簡単に述べて置かう。

元來讀書といふことは、人間に取つて極めて有益であり、殊に興味の多いものである。而して人は何の爲めに讀書するかといはゞ、全く書中の思想内容を理解し、咀嚼して以て己の血となし肉と爲さんが爲めであるから、能く之れを理解し、咀嚼し得るまでは何うしても熟讀玩味しなければならぬ。されば讀書は之れを精讀すべきか略讀すべきかは、有益なる書籍に對しては全く問題にならない。要は理解し咀嚼し得るまでは何うしても讀まなければ書中の意義思想を我が物と爲すことが出來ない。

然し讀書の方法として茲に注意すべきことは、凡そ人間が讀書するに當りては能く其の全力を傾注して書中の思想内容を理解するが爲めに、熟讀玩味して咀嚼するにあるから、彼の終日書に向ふも、其の心書中に在らざれば、全く空々寂々の徒て讀書に依つて人間に何等の得る所はないのである。されば昔人の所謂眼光紙背に徹する底の努力を以て、能く之れを讀破すれば、讀書の趣味と實益とは益々大なるものとなるのである。例へば偉大なる人物の傳記を讀むとすれば、全く自己をその對象人物たる偉人の境遇地位に於いて、熟讀玩味すれば自己は知らず識らずの間に、讀書三昧の境に入りて、全く書中の人物と相接觸して事を處するの有様となりて、趣味の津々たると共に有益なる研究となる譯である。獨り個人の傳記のみに止まらず、古往今來の歴史を繙くにしても、或は農業經濟の書を讀むにしても、將た又科學に關する書を讀むとしても、讀書に對するの用意は正に斯くの如くて無ければ、

所謂讀書萬卷、得る所果して幾何ぞといふ嘆聲を發するに至るのである。

殊に人に依りては有益なる一冊の書籍を讀むに當りても、其態度が極めて輕佻浮薄で此處彼處と散らし讀みをして、其の全部を讀破しないものがあるが、之れは實に輕薄極まる讀書法で、斯かる人物は幾ら書籍を有して居ても、其の書籍に由りて何等の益をも得る能はざる人物である。されば之等の人物は何事に從事するにしても、到底健全なる進歩發達を期することは覺束ない。何んとなれば全部を讀了して徹底したる見解を得ること能はず、無暗矢鱈に此處を噛み彼處を食ふといふが如くに食ひ散らすものは、其の人物の大體も殆んど想像せられるものである。即ち其の志操は健實を缺き、朝には甲事を營み夕には乙事に従ふといふべきが如き態度であるから、其の心理状態を知ることが出来る。されば讀書に意を用ふるものは、既に一卷を讀みかけたら、之れを讀了するに有らざれば決して他書に移らずといふ覺悟

で讀書し、其の心境を極めて爽快にして、書中の思想内容を解剖し分解し、隨感隨記、其の感想を記して之れを保存して他日の用に供するの用意をなし、十分に咀嚼玩味しなければならぬ。要するに斯かる用意を以て讀書すれば、能く書中の思想内容を理解して、一度び之れを繙きたるものは終生之れを忘るゝ能はざる事となるのである。

要するに讀書は人生に取りては、實益あると共に趣味豊富なるものである。されば時に興到れば朗々と之を讀誦するもの可なりである、現に我輩は毎朝起床後、庭園に散歩した後、興湧き來れば快心の文章を朗々と讀み去り讀み來るのである。

次に又、讀書の範圍に就いて一言すると、各人がその業務に關する専門の書籍を讀んで研究を重ねるといふことは、固より其の専門の立場より見て、極めて大切な言ふを俟たないが、人は其の専門とする業務、所謂一技一能に通曉すると同時

に、同時に又其の各自の専門以外に於ける讀書に趣味を有するといふことは、全く各自の趣味思想を豊富にし、併せて精神的の快樂を増進する所以であると思ふから彼の不健全なる道樂に耽けるといふが如きを一新し、所謂専門家なるものが、下らぬ道樂に耽ける時間を利用して、健全にして且つ趣味實益の豊富なる、専門以外の讀書場裡に逍遙するといふことは極めて望ましいことである。要するに人間は肉體も精神も共に健全なる發達をして能く忠實に活動すると共に、一面にはよく安眠するといふことに心掛けねばならぬ、固より此の安眠といふことに就いては體力の強健なるべきは勿論であるが、幾ら體力が強健でも精神状態が不安では駄目である。而して精神の健全なる發達を爲すには、其の心事の公明正大なることを期しなければならぬ。心事の公明正大なるを期するには、有益なる讀書に依りて得る所の影響は實に尠くないのである。

絶倫の精力蓄積要件

個人も國家も變りはない。個人にして精力絶倫のものなれば必ず世に成功する。精力のないものは到底世に立つことは出来ない。國家も同様である。國家が精力絶倫なれば、其の國家は必ず榮える。個人の精力は即ちエネルギーである如く、國家の精力も亦エネルギーである。國家のエネルギーは即ち國民個々の精力であるから、國家を興隆せしむる上よりいふも、國民個々の精力の旺盛ならしむることを心掛けなければならない。

さて人々が精力の絶倫を期し、剛健の精神を得る要件として茲に説くべきは、樂天的生活、節慾生活、超然的生活である。今更ら述ぶるまでもなく、世の中は益々激しくなつて来る。生存競争は愈々激しくなり、優勝劣敗の有様は愈々其の度を増

して来る。之れを一面から考へて見ると、世の中は甚だ苦痛の如く考へられる。面白くなく思はれる。之れが即ち薄志弱行である。世の中を苦痛に考へ、世の中を面白くなく考へるといふことが一片胸中に兆して来ると、萬事休せり、最早駄目である。併しながら活きた人として種々なことを考へるのは當然な譯で、今の人がかりではない、昔の人も矢張り左様考へた。例へば前にもいつた高杉晋作と九州の女傑野村もと、即望東尼との間に應酬した所の和歌、「面白きこともなき世を面白く住みなすものは心なりけり、」此の歌の中には深甚の意味を有つて居る、所謂人生の機微に觸れて居る、極めて處世の要訣を言ひ現して居るものであると思ふ。高杉晋作と野村もと尼何れも世に稀なる人傑で、此の稀なる人傑であつても、決して世の中は始終面白いものではなかつたのである。面白くない世の中をも之れを面白く住みなさうといふは、自分の心を以て強ひて面白くするのである。此の歌の中には實に斯う

いふ言ふべからざる快味がある。心には面白くない世の中をも面白く住みなさうといふのであるから、襟懷極めて豪宕、胸中甚だ餘裕がある。自分の心を以て世の中を面白くしようといふから、餘程愉快なものである。此の考へを胸中に抱いて、此の意味を以て其人を想望するに、直接遇うたともなければ、其の人の風采意氣を想像するに、必ず快潤な、愉快な、殆んど一世を吞吐する風采のあつた人であらうと思はれる。即ち物に屈託するとか、煩悶をするとか、鬱陶しい思ひをするとかいふやうなことは決してないのである。自からの心を以て世の中を面白く住みなさう、面白くなくとも面白くして行かうといふのであるから、我輩は實に愉快なこと考へて居る。人は須らく斯くありたいものである。世上の事々物々悉く面白いといふ考を以て見れば悉く面白くなる。面白からぬといふ考を以て見れば、縦令面白いものを見ても面白くない感起す。高杉普作と野村望東尼との間に、斯かる世の中を

達觀して居たといふことは、誠に其の人を想像する上に於いても、極めて愉快に、又我々が此の煩はしき世の中に住んで行くには是非とも此の考を持つて居なければならぬものであると思ふ。

眞の幸福と幸福生活

更らに言を進めていへば、人が幸福を望むといふのは、之れは人類當然な譯である。さて幸福とは如何なるものなるかといふとは一つの問題であるが、先づ誰も考へるは美衣美食金殿玉樓の住居、世上に榮華を競ひ度い。是れは普通誰もチョット考へる。之には又今の歌のやうに面白い言葉がある、「鷓鴣巢_ニ於深林_ニ不_レ過_ニ一枝_一」。「鷓鴣といふと六ヶ敷い言葉であるが、何れ之れは山鳥とか鳩とか一種の鳥であると思つて置けばよい。此の鳥は無理やりに深林を撰む。無暗に深い林を撰む。何んでも深

い林に居ることを望む。さうして諸方を巡つて探すが、それ程大きな林、深い林を撰む鳥ではあるけれども、實際その鳥の巢を造る所を見ると唯一本の枝に過ぎないのである。無暗に食つて見て、無暗に深い林を撰んでは見るけれども、其の鳥の巢をくう枝は只だ一本に過ぎないといふ意味である。丁度人間も之れと變りはない、金殿玉樓、大厦高樓種々の方法を盡し、種々の贅澤はして居るけれども、實際人の寝る所は八疊の部屋か十疊の部屋、それ以上に寝られるものでない。結局それ以上は却つて寒いのである。結局深い林を撰らんで見るけれども、巢をくふ所は一本の枝だ。人間にした所が大厦高樓を造り出して見るけれども、寝る所は八疊か十疊、それ以上は寒くてならぬ。それから種々の美衣美食、色々のことをやる。併しこれとても高の知れたことで、必要以上のことをやると結局は身體を悪くする。精神を悪くする。無暗に美食に飽き、酒食に惑溺すると、終ひには身體を悪くする。一時

は愉快らしい考を持つて居るが、翌日は甚だ不愉快である。それが重り重なる結果は到頭心身共に不健全、之れは疑ひないことである。さうすると所謂それが幸福か、そんな物は實際幸福ではない、不幸なことである。

然らば幸福なる者は果して如何なる者であるか。我輩はさう思ふ。世の中に一人でも多く自分に恨みを結んだものがあつたならば、甚だ世の中は頼母しくない面白くない。之れに反して一人でも多く其の人の爲めに良い感じを持ち、有り難く感じて居るものがあると考へたならば如何であらう。人から好い感じを持たれて悪い氣持のするものはあるまい。さうすると一人よりは二人、二人よりは三人、或は十人、或は百人、千人、萬人、延いて五千萬の國民五千萬人の國民悉くといふ譯には行くまいが、五千萬の國民中其の多數が、其の人の行爲を徳と考へ、良いことをして呉れて居ると感じて居るといふことを自分自身に考へたならば、其の人の胸中必ずや

愉快を感じずには居られない。是れが眞の人生の幸福、所謂道義に基ける人生の幸福である。終には之れを大にして世界の人がさう考へたならば、尙ほ氣持が良くなつて來るに違ひない。而して此の意味を約めて言へば、結まりは自己の爲めよりは人の爲めに働く、人の爲めに働いて居る、人が自分の行爲を誠に有り難く感ずる。恩に感ずる。怨むどころではない、多數の人が其の人の行爲を非常に敬服して、有り難く思うて居るといふ感じが出たならば、自分は胸中に愉快を感ずる。即ち他の爲めに働くといふことは、結局自己の愉快を誘起する基である。自己が胸中に極めて愉快を感ずるといふものは、是れ程幸福なるはない。之れが所謂人生の眞のハッピーである。

積極的處世戰闘主義

上述の樂天主義、節慾主義、超然主義は、此の優勝劣敗生存競争の激烈なる社會に處するには、何づれかといへば消極的である。更らに進みて積極的の心掛けがなくてはならぬ。それは如何といふに、人々が此の世の中に處する内には困難に遭遇するのが多いのである、仲々好いことは少ないもので、天氣の快い日は少くて天氣の悪い日が多いやうに、人生には非常に艱難が多い。此の困難に打ち勝つといふのが豪い所である。けれども更らに尙一步進めて、困難に遭遇して見たいといふのが一層豪い。喜んで困難を迎へるといふとは一層豪いと思ふ。困難を困難と考へざる位ではなく、もつとく困難に遇つて見よう、どれだけ困難に對して乃公の力が堪へられるか一つ試して見ようといふ勇氣に至つては甚だ壯快に感ずるのである。斯かる考へを有つて居れば小困難、些細なことに屈託することなく、心身をして甚だ愉快に感ぜしめる。而して又之れを實現する方法、之れを又我輩は平素考へて居るので

ある。人は困難に遭遇すれば其際矢張り逡巡する、タヂ／＼するものである。其の時分に之れを六ヶ敷い言葉で書くと、支那文字ならば「豈夫」と書くであらうと思ふが、之れを平易にいへば「ナニツ」といふことである。モウ一つそれをいふと、「ナニ糞ツ」、糞が要らなければ糞は取つても宜い。是れは妙である。少々の困難に出つくはして見た所で、漢語でいへば、豈夫、平たくいへば、ナニツ、斯ういふのである。之れが最の秘訣である。人と争ひ喧嘩を始める。其の時には兩方とも敗けてはならぬといふ氣が出る。其の時に、ナニツと耐へる奴が、到頭向ふを負かして仕舞ふ。是は最も最後に來たナニである。それは今のやうな喧嘩は甚だ宜くない。それは悪い方に使ふのであるが、此のナニツなる言葉は、さういふやうな場合の積極の時ばかりではない。消極の方は却つて六ヶ敷い。それは何かといふと多少苦痛を感ずることが出来る。我輩の如きもさういふ経験があるが、人と頻りに論争をし

て、場合に依ると憤怒に堪えられぬことが出来る。其の時にそれをやつて仕舞つては駄目である。其の時には消極的に胸中にナニツと考へて自ら憤怒を抑へるのである。それを言換れば耐忍、種々の言葉があるが、社會に處して段々やつて行く中には、癢に障つて耐らぬことがある。我々なども能く議會などで随分ひどいことをいふので堪らぬと思ふことがある。けれども其の時に堪らぬなどいふ考を持つたら到底駄目である。其の時には今云ふ矢張り、ナニ糞ツで往かなければならぬ。是は極く平易なことで、何んでもないことであるけれども、併しさういふ極く平たい何んでもない事の内に、斯様な面白い意味が多く含まれて居る。何も六ヶ敷い言葉を澤山並べる必要はない。日常の平易な言葉の中に深甚の意味を有して居る。唯だ能く之れを翫味して實行するのである。

眞の大勇と充實生活

然らば如何にして之れを實行するかといふに要するに、勇氣の一點である。勇氣といふのは唯だ肩臂を怒らしてやつて居るのが勇氣ではない、冒すべからざる一種の氣魄を要するといふとは何處から湧き出づるかといふに、是れは胸中に確信なくしては生ぜぬ。確信なくして勇氣は決して生ぜぬ。確信なくして生じたるものは本當の勇氣ではない。それは直ちに人に見透かされて仕舞ふ。胸中に一種の確信を生じ、此の確信より迸る勇氣、之れが本當の勇氣である。そこで此の確信なるものは、何ういふものかといふに、人といふものは非常に靈妙なものである。靈妙なものだけそれだけに自己を知る。人よりも自分の方が恐ろしい。

慎獨、獨りを慎しむといふは、自己程恐ろしいものはない。隠れたるよりは現は

るゝはなく、微より顯なるはなし、自分のことは自分の方が先きに知つて居る。自己に何か安んぜぬことがしてあるか、何か物足らぬことがしてあるか、或は何等か不都合なことがしてあると、他人が知る知らぬより先に自分が知つて居る。例せば今自分より目上の人に呼ばれる、チヨツと来て貰ひ度いと呼ばれる事があると、其の場合には先づ自分が考へて見て何うも之れに不忠實なことがあつた、何うも二三日甚だ宜くなかつたと思ふことがあると、必ず自分の胸にグツと来る。ア、之れは屹度叱言だ、愈々之れは叱言を食ふに違ひないと思ふ。それだから其の人の前に出ると何となく聲がこそばゆい。先方の顔までが變に恐ろしく見ゆる。従つて其の舉動が甚だ宜しくない。所が之れに反して今迄で勤勉忠實にして職務上に於いても、私行の上に於いても一點非難を受くるが如きことの無い場合には、必ず斯ういふ感じが直ぐに起る。ハ、ア屹度乃公を賞めるな、左もなければ良いことを言ひ付けるだ

らうと斯う思ふ。自然に舉動も泰然自若と構へて居るから、向ふから見てもさう見えるに違ひない。自分もさう見える。是れが詰りは何かといふと結局慎獨、獨りを慎む、人の知る知らぬに拘はらず、自分の胸中に顧みて萬缺點なし、職業に於いても技倆に於ても、物足らぬ所はないといふ考を其處に持つて居つたならば、人が貶した所が、ナニ今に分ると思ふ。自己が考へて見て自分の心が充實してあれば、それ丈の事は必ず發揮する。又良し人から賞められて見た所が自分に顧みては何うもさうではないと思ふ時には、何と無く不安の思がするのである。故にどちらかといふと、他人の方よりも自分の方が先に分る。人として世に立つに就いては、何うしても是れがなければならぬ。

之れに就いて我輩が始終服膺すべき言葉として忘れないのは、「行者不慊於心則餒」と之れである。之れは非常に面白い。心に慊たらざれば即ち餒う、心に飽き足

つて居れば餒えない、心に慊足らないので饑えた形を有つて行けば自然に舉動に現はれる。決して之れで勇氣が出るものではない。心充實し、心に飽足つて居つたならば其の人は立派なもので、所謂「雖三千萬人一吾往矣」、之れが眞勇である。是れ程壯烈な勇氣はない。假令何んといはうが千萬人と雖も我れ行かん、是れが眞勇である。茲に到らなければ本當ではない。

人の心は極めて靈妙なものであるといふことに就いて最う一つ斯ういふことがある。苟くも胸裡に憎惡の心を生ずれば直ちに反響す。自分の胸中に一點或る人を憎むといふ念が生ずる。彼は不可ないと考へると、直ぐその心が先方に響く。向ふでも必ず此方に對して、彼は不可ないと思ふ、是れは實に不思議である。此方から又彼の人は良い人だと思ふと、其の感じが必ず向ふにも通ずる。相互に之れは良いとする。世の中には人を褒めたり貶したりする。其の間の關係を見るに、一方で褒め

る者は必ず一方も褒めて居る。一方が貶なすものは他方も必ず貶なす。両方で褒め合ひ両方で貶し合ふ、相互にさうなつて居る。總べてが其の通り、苟くも人を憎いといふ念が生ずれば必ず先方も自分を憎むし、向うを宜く見るといふ考へがある。と、向ふも此方を宜く見る。是れはもう争ふべからざる事である。此の故に結局人に良く見られようといふ考へを持つたならば、先づ自分から先方を良く見るといふことが必要である。此の考を持たなければ世界は狭い、世間が狭くなると、誰の顔を見ても面白くないといふことになる。之れでは到底いけぬ。是れは矢張り自分の心の思ひ爲して、どんなにして見ても餘程のことがなければ人を悪くは見ない、出來得る限り人を能く見て行く、是れは必要である。何うしても社會に立つてやつて行かうといふ考を持つたならば、これではなければならぬ。是れは上長に對し、下級に對し、同僚に對し、家内に對し、總べて此の考を以て行くのが肝要であり、是

れ心胖く體寛かに、知らず識らず元氣充實し、精力横溢するに至る要訣である。

悠々自適光風霽月

精力増進の一要素として、心胖く體寛かに、悠々自適光風霽月の生活を得る一要件を附け加へて置かう。抑々神は人間に完全を與へずといふ格言の通り、人間として恐らく缺點のないものはなからう。故に人と交際し、若しくは人を用ふるには只だ其の長所美點を取りて之れを用ふれば夫れでよいのである。苟も人間として生れ、無爲無能と來ては、お話しにならぬが、何か一技一藝に秀でて居れば、他に缺點があつても夫れを用ひて行くのが、所謂利用厚生之道である。熟ら世間の人物を見渡すに、随分色々の惡評を受けて居て、よくあれであの地位が保たれ、亦た側で保たせて置いたものだと思はるゝ人間が澤山ある。併し精細に研究して見ると、其

の人は其の地位を保つべき理由があつて保つて居るのであつて、決して偶然でも異數でも何でも無い。即ち其の人には徳望がなくても、拔群の力量があるとか、若しくは或る缺點があつても、優に夫れを補ふに足る他の長所があるとか、それ／＼其人物に相應した地位を社會が與へて居るのであつて、其の點は社會は甚だ公平である。若し一人あつて、其の人が力量以上の地位を假りに一時占めたとしても社會的バランスとでもいふものがあつて、直ちに其の力量相當の地位に下げて仕舞ふ。其の點は丁度物の相場のやうなものであつて、一時不當の奔騰をしても、直ちに需用供給の關係で下ると同様である。それは兎に角、社會にありて、其の地位を維持して居る人は、必ず維持すべき理由があることは、疑ふべからざる事實である。一例をいへば世間で後藤男の事を彼れ是れ批評する者もあるやうだが、男が今日社會的名聲を得て居るに就いては慥かに其の理由がある。實際男に親近して見ると男に

は非常によい所がある。男には缺點もあるが、其の美點は優に其の缺點と差引して本より餘りある。即ち男が今日の地位名聲を維持して居る所以も、決して偶然ではないのである。亦た長森藤吉郎といふ人がある。此の人は多年の同僚で、今迄親しく交際して居る。相馬事件の時、係檢事として、後藤男を訊問した時、公平の態度を用ひたので有名であるが、此の人には亦非常の長所がある。同時に又非常の缺點がある。其の長所といふのは、物事を計畫するや、才思湧出、發案泉の如く、多々益々辯ずるの概があるが、どうも其の發案計畫には屹度何處にか遺漏がある。若し此の缺點さへなければ、彼の如きは實に當代比類なき手腕家であらうと思ふ。斯様に天が完全を與へざる所が、社會の妙味たる所以であらう。此の點を能く味つて人に對し社會に對して過大の要求を爲さず、長所を探つて短所を見ざるやうにすれば、不平等なく、怨み少なく、無用の妄念妄想の爲めに精力思念を浪費することな

く暮すことが出来る。

精力の源泉熟睡法

凡そ成功には其の爲すべき事業に向つて、全能力を集注すること、即ち全力を傾注することが極めて大切である。一事業を成すに當つて心が散亂するやうでは、其事業に全力を傾注することが出来ず、従つて成功は覺束ない事であらうと思ふ。身體の極めて薄弱なもの、病身なるものは別として、相當の健康を有するものが、堅忍不撓の決心を以て、其の爲すべき一事に腦力を集注して、それでその事が成就せぬ筈はないのである。

然し如何に一事に腦力を集注して其事に全力を盡さうとしても、頭腦の具合が悪く、身體の精力乏しければ、いふべくして行ひ難い。然らば如何なる方法に依つて

頭腦を明晰にし、精力を旺盛ならしむべきかといふ事が、一層重大な問題になつて来る。

我輩多年の實驗に依れば、頭腦を明晰にし、精力を旺盛ならしめんには、熟睡が最良の方法である。我輩は此の熟睡は人生に於ける成功の根柢なると共に健康の根柢であつて、又人生第一の快事であると思ふ。人は睡眠不足の翌日の如く、頭腦の不明晰にして身體に元氣の乏しいことはないが、之れに反して人は熟睡すると、一夜の中に有ゆる頭腦の汚濁が一掃される。翌朝には頭腦が明晰になり、精力が旺盛になり、活潑潑地として全身に元氣が漲ぎ、心散亂せず、人の話すことが明瞭に理解される。物を見ても明瞭に見える。眼光は事物の脊後までも透徹するやうになる。此明晰な頭腦、この旺盛な精力を以て事に當らば、天下の何事か成就せぬことがあらうぞ。學生は此頭腦と精力とを傾注して學問し、事業家は此の頭腦と精力と

を傾注して事業に従ひ、官吏は此の頭腦と精力とを傾注して事務を執りなば、必ず拔群の功果を奏することは疑を容れぬ。

斯かる明晰な頭腦と旺盛な勢力とを以て事に當りなば一日より一日、一月より一月、一年より一年と次第に進歩發展して最後には必ず成功の域に達する。之れ實に成功の秘訣である。斯くして倦まなければ、世の何事も不可能のことはないことを我輩は確信して疑はない。

然らば熟睡は何うして得らるゝかといふに、之れには二つの條件が必要である。それは心の慰安と身體の疲勞とである。此の二つを缺けば人は熟睡することは困難である。此慰安と疲勞とは何から得らるゝかといふに、全力を盡して自分の事業の爲めに勤勞すること、即ち自分の及ぶ限りの力を以て其の任務に當ることである。世に全力を以て自分の任務を盡せる程、後に顧みて愉快に感ずることはない。又其

の勤勞に依りて得たる疲勞ほど心地よいものはない。學生ならば今日爲すべきことを今日の中に熱心に研究し、官吏なら其の日に爲すべきことは、其の日の中に完全に遂げる。斯くすると夜になつて其日一日のことを顧みて衷心非常に愉快を感ずる。そして心地よき疲勞と慰安とに依つて、心地よく熟睡することが出来る。

之れに反して爲すべき事も爲さずに置き、其の日一日全力を盡して事に當らずに、いゝ加減なことをして怠けたり、胡魔化したりすると、後に其の事を顧みて何んとなし不愉快で心に疾しく感じ、身體も充分の疲勞を感じないので、到底心地よく熟睡することが出来ぬ。聖人に夢無しといふのは、熟睡を意味するのである。眞の熟睡は夢を見るべきものでない。寐覺めがよくないなどいふのは、心に疾ましい事をして居るから、心が波立つて居るのである。即ち熟睡が出来ぬのである。心の慰安と勤勞より得た疲勞の如く人を心地よき熟睡に導くものはなし。

我輩などは随分永く官途に就いて居つて、劇職にあつて多忙な事務を執掌したが、未だ嘗て一日も缺勤したことはない。そして其の職務に全力を傾注し得たのは、皆此の熟睡の功果であると信ずる。

我輩は役所に出て何事も忘れて只だ其の職務に盡瘁するので、家に歸ると尠なからず疲勞する。夕飯を食して後一日の勤勞を顧みると實にいふべからざる心の慰安を感じる。それ故に床に就けばその儘前後不覺翌朝まで一睡である。そして翌朝五時にはきちんと眼が覺める。斯くて前日の疲勞は拭ふやうに取れる。心身が回復し、頭腦が明晰になり、精力が全身に充實する。是れ我輩の實驗である。

第八節 強力餘訓

青年の地位と指導點

今日は實に青年の前途に對して深く心を用ふべき時であると思ふ。此事は獨り之を政府の手に委せて功果の擧らんを待つは極めて困難のことで、これこそ所謂國民總懸りて、上下一致の力を以て努力もし、盡瘁もせねばならないのである。今や世界各國共に殆んど申合せたるが如く、青年の將來に就て深き注意を拂ひ、種々なる苦心を重ねて、之が適切なる誘導に盡力しつゝある。各國が青年の爲めに特に深き注意を拂へることは、現世紀に於ける顯著なる傾向というて差支ない。世人の常に言ふが如く、將來の國家は青年の双肩に懸れるもので、従つて國家の前途を想ふ者

が現在に於ける青年の身の上を氣遣ふことは誠に至當の事であり、青年自身も亦將來に對する責任の重大なるを自覺し、之れに堪ゆるだけの能力を養成するに努力せねばならぬ。

さて青年の將來は如何なる方法で指導するが宜しきか、如何なる考を持たしむべきものなるか、何人も此點に就いては種々なる思考を費すのであるが、實際に就いて其効果を擧げんとするには、なか／＼容易ならざる困難が伴うて來るのである。恰度政治が日を追うて益々困難となるが如く、多數の人々を支配し、之れを統一し結果あらしめて働さを爲さしむるとは、實に容易ならぬ難事である。故伊藤公も屢々「政治は實に困難なるものである。之れをいふは易けれども之れを行ふは難い。憲法政治憲法政治と一言に言へど、さて實際に於いて我が國情、我が國體に伴うたる憲法政治の實を擧げんとするには、第一に國民を啓發せねばならぬ。國民自ら十

分に啓發せられ、我國體國狀を審にし、至當なる政治に向はねばならぬことを自覺するに至らねば、容易に之れが効果を擧ぐることは出來ぬ」と、事に當り物に觸れて屢々述懐を漏らされたことがある。之れは爲政者の實際の告白である。

前に述べたる獨逸のビュローロ公の述懐も矢張り此の點を能く説明したものである。重ねて其の述懐の主要を一言せんに、「實に國民を統一し統御して一定の方針に向はしめ、一定の目的を達せんとするは中々容易のことではない。殊に我が獨逸國民の如く理屈が八ヶましく、論理に強き國民は容易に人のいふことに服従せず、衷心より成程と合點し得るに至らなければ中々に承知せぬ。然るに今日我が獨逸人が各種の科學に研究の驚くべき力を伸べ、機械の發明より化學、工藝、醫學は勿論、有ゆる學理と學術との上に於いて嶄然として頭角を現はし、何事に就いても學術の淵奥を究むることを心掛け、而して其の究め得たる學理は又之れを實際の上に應用

し、殖産興業を始めとし、一般經濟の上にも推し及ぼすに至り、又嘗て天然に於いて礪礪にして不毛の土地が、豊饒繁盛の土地に一變したのも、工業國として世界に雄飛するやうになつたのも全く理屈詰な此熱心の性格より生み出された結果なりといふべく、又國防軍事の如きも、其の負擔の苛重なること既に容易のことてなく、而して更らに進んで兵役に身を投ずることが一通りならぬ犠牲であるにも拘らず今日の世界は斯の如き趨勢にある。又白耳曼國の實狀は斯くの如くである。而して人口は漸次に増加し現在の儘にて之れを包容することは出来ぬ。こゝは如何なる困難に逢遭するも國勢の發展を計らねばならぬ。國運の伸暢を期せねばならぬのである。故に白耳曼帝國の爲めに獨逸國民全部の爲めに、鞏固なる國防の施設を必要とするに充分に説明し、國際の關係、各自の立場を了解せしめ得れば、理屈強き國民なるだけ其の理解力も早く、而して以上の道理が理解せらるれば、國民は進んで

國防の爲めにも盡し、一身を犠牲にして軍務に服従し、爲めに驚くべき成績をも擧ぐることを得るのである。畢竟するに之れは精確を尊び、何事も理屈詰によりて進まんとする國民性の最も頼もしき所である」云々の意を述べて居る。一國政治家の心を用ふるは常に斯かる點にあるのである。

兎角獨逸に於いては何事も壓制的であると思ひ、ビスマークの行動といへば直ちに鐵血政策を想像し、獨逸は何事も暴壓的に壓制するものであらうと考へる者もあるが、これは全く誤つた想像である。左様なことによりて獨逸人は制御せられ統一されて行く國民ではない。勿論時としては一國の宰相たるものが、國家の興亡には代へ難しと思ひ、非常なる大英斷を振ふことも決して稀ではないが、それにしても其の時の胸中の苦心は實に容易ならぬものである。又慎重なる注意を拂うての上で決して無暗に押し付けて行けるものでは斷じてない。何處までも衷心より納得せし

め、充分に諒解せしめ、當然のことであると感ぜしめざれば到底永續的に鞏固なる統一を維くことは出来ぬ。獨逸の文化が發達し、戦争に強いといふのも、彼等が自己の目的を自覺し確信し、之れに由つて進まねばならぬことを衷心より理解せる爲めである。

大正青年と明治青年

我輩は實に斯う思ふ。我が將來の國家を負擔すべき青年をして各々其の向ふ所を誤らざらしめ、各々其の分を盡して、茲に益々國運の興隆發展の途を開かんとするには、是非とも斯くならねばならぬといふ必要な關係を説き、青年をしてよく其の事情を知らしめねばならぬと思ふ。必要ほど強き道理はない。何事も之れより割り出したものでなければ強き力がない。而して今や我國の青年は此の理論を聞き

道理を解するの力を有すること、ビエーロー公の説いた獨逸國民と同様なる趣がある。

元來青年時代は懷疑時代である。事々物々總べて疑ひの源となり研究の對照となる青年が、理屈ッボクなるは青年の本性ともいふべきであらう。殊に今の青年は封建時代以來の因襲より解放せられ、道理の存する所飽くまでも之れを研究し、自己の是と信じたる所は之れを主張するの性格を有するのみならず、最近學說の普及と進歩とは、自然科学に關する智識と、政治經濟に關する議論とを多からしめ、事物に對する觀察が批評的になつて來た傾きがある。物理化學に徹底した議論を試みるものは、同時に政治經濟に對しても、社會の日常生活に對しても自ら理屈ッボクならざるを得ないのである。兩者は共通で、一を揚げて他を抑ふることは出来ぬ。今の青年が動もすれば自説を採つて先輩の言に聽かず各種の新思想が輸入せられ、統一